

第10章

主クリシュナ、 ドウヴァーラカーへ帰還する

第1節

शौनक उवाच

हत्वा स्वरिक्थस्पृध आततायिनो
युधिष्ठिरो धर्मभृतां वरिष्ठः ।
सहानुजैः प्रत्यवरुद्धभोजनः
कथं प्रवृत्तः किमकार्षीत्ततः ॥ १ ॥

シャウナカ ウヴァーチャ
śaunaka uvāca

ハトウヴァー スヴァリクタハ・スプリダハ アータターイノー
hatvā svariktha-spr̥dha ātatāyino

ユディシュティロー ダハルマ・プフリターンム ヴァリシュタハハ
yudhiṣṭhiro dharma-bhṛtām variṣṭhaḥ

サハーヌジャイヒ プラテャヴァルッダハ・ボホージャナハ
sahānujaiḥ pratyavaruddha-bhojanaḥ

カタハンム ブラヴリッタハ キンム アカーラシートウ タタハ
katham pravṛttaḥ kim akāraṣīt tataḥ

śaunakaḥ uvāca—シャウナカが尋ねた; *hatvā*—殺したあと; *svariktha*—正式な相続;
spr̥dhaḥ—強奪することを望んで; *ātatāyinaḥ*—侵略者; *yudhiṣṭhiraḥ*—ユディシュティラ
王; *dharma-bhṛtām*—宗教原則に厳格に従う者たちの; *variṣṭhaḥ*—もっとも偉大な;
saha-anujaiḥ—弟たちと; *pratyavaruddha*—制限されて; *bhojanaḥ*—必需品の受けいれ;
katham—どのように; *pravṛttaḥ*—従事して; *kim*—なにを; *akāraṣīt*—実行して; *tataḥ*—そ
のあと。

シャウナカ・ムニが尋ねた。「正式な相続権を奪おうとした敵を殺害したあと、もっとも偉大な宗教家であるマハーラージャ・ユディシュティラは、弟たちに支えられながら、どのように市民を治めたのでしょうか。王国の富を好き勝手に楽しむことは、もちろんできなかつたはずですよ」

要旨解説

マハーラージャ・ユディシュティラは、宗教家のなかでもっとも偉大な人物でした。ですから、親族を殺してまで王国を楽しむつもりはみじんもありませんでした。ハスティナープラ国の正当な統治権はユディシュティラ王にあり、従兄弟たちがそれを強奪しようとしたために、正しい主権のために戦ったのです。しかし、主シュリー・クリシュナに導かれて正義の旗のもとで戦ったものの、従兄弟たち全員が戦死したことから、王国を楽しむ気にはなれませんでした。ですから、弟たちに支えられながら、義務として王国を治めました。この質問はシャウナカ・リシにとって重要な意味があります。王国を自由に楽しむ立場にあったマハーラージャ・ユディシュティラが、どのようにふるまったか知りたかったのです。

第2節

सूत उवाच

वंशं कुरोर्वशदवाग्निनिर्हतं

संरोहयित्वा भवभावनो हरिः ।

निवेशयित्वा निजराज्य ईश्वरो

युधिष्ठिरं प्रीतमना बभूव ह ॥ २ ॥

スータ ウヴァーチャ

sūta uvāca

ヴァンムシャンム クロール ヴァンムシャ・ダヴァーグニ・ニルフリタンム

vaṁśam kuror vaṁśa-davāgni-nirhṛtam

サンムローハイトウヴァー バハヴァ・バハヴァノー ハリヒ

samrohayitvā bhava-bhāvano hariḥ

ニヴェーシャイトウヴァー ニジャ・ラージャ イーシュヴァロー

niveśayitvā nija-rājya īśvaro

ユディシュティランム プリータ・マナー バブフヴァー ハ

yudhiṣṭhiram prīta-manā babhūva ha

sūtaḥ uvāca—スータ・ゴースヴァーミーが答えた; vaṁśam—王家; kuroḥ—クル王の; vaṁśa-dava-agni—竹によって発生した山火事; nirhṛtam—消滅した; samrohayitvā—その王家という木; bhava-bhāvanaḥ—創造界の維持者; hariḥ—人格主神、シュリー・クリシュナ; niveśayitvā—再確立させて; nija-rājye—自分の王国の中に; īśvaraḥ—至高主; yudhiṣṭhiram—マハーラージャ・ユディシュティラに; prīta-manāḥ—主は喜んで; babhūva ha—～になった。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「世界を維持する主シュリー・クリシュナ、至高人格主神は、マハーラーヂ・ユディシュティラを王座に就け、そして怒りによる竹林火災で消失していたクル王家を復活させたあと、満足した」

要旨解説

この世界は竹がこすれあって発生する火事に例えられます。竹は人為的にこすれあるのではなく、自然に発生します。同じように物質界では、物質自然を支配しようとする者たちの怒りが反応しあい、戦争という火が発生し、不必要な人々を消失させます。しかし主は、そのように起こる火事や戦争にはまったくかかりがありません。それでも、創造界を維持させるため、神の王国につながる自己の悟りの正しい方法に大衆が従ってくれることを望みます。主は苦しんでいる人々が三重の物質的苦悩を終わらせ、ふるさとに、自分の元にもどってほしいと思っています。創造界そのものがそのように計画されており、そのことに気づかない人は、主の幻想エネルギーに惑わされながら物質界で苦しみつづけなくてはなりません。だからこそ、主は正しい代表者に世界を治めてもらいたいと考え、そのような体制を築くために降誕し、主の計画に関係のない不必要な人々を殺します。クルクシェートラの戦いは主の計画どおりに起こりましたが、それは、望ましくない人々を世界から締めだし、主の献愛者が治める平和な国を築くという大義があったからです。ですから主は、ユディシュティラ王が王座に就き、のちに救われることになるマハーラーヂャ・パリークシットが誕生するクル王家という木に十分に満足したのです。

第3節

निशम्य भीष्मोक्तमथाच्युतोक्तं
प्रवृत्तविज्ञानविधूतविभ्रमः ।
शशास गामिन्द्र इवाजिताश्रयः
परिध्युपान्तामनुजानुवर्तितः ॥ ३ ॥

ニシャミヤ ビヒーシュモークタナム アタハーツチュトクタンム
niśamya bhīṣmoktam athācyutoktam

プラヴリッタ・ヴィギヤーナ・ヴィドウータ・ビブフラマハ
pravṛtta-vijñāna-vidhūta-vibhramah

シャシャーサ ガーンム インドウラ イヴァージターシュラヤハ
śaśāsa gām indra ivājitāśrayah

パリデュパーンターンム アヌジャーヌヴァルティタハ
paridhyupāntām anujānuvartitah

niśamya—聞いたあと; *bhīṣma-uktam*—ビーシュマデーヴァによって語られたこと; *atha*—もまた; *acyuta-uktam*—完全無欠の主によって語られたこと; *pravṛtta*—〜に従事して; *vijñāna*—完璧な知識; *vidhūta*—完全に洗いながして; *vibhramah*—すべての不安; *śāsāsa*—統治した; *gām*—地球; *indra*—天国の惑星の王; *iva*—〜のように; *ajita-āśrayah*—無敵の主に守られて; *paridhi-upāntām*—海を含めて; *anuja*—弟たち; *anuvartitah*—彼らに従われて。

マハーラージ・ユディシュティラは、ビーシュマデーヴァと完全無欠の主シュリー・クリシュナの教えを聞いてすべてを理解したあと、完璧な知識にもとづいて行動した。すべての不安を払拭したからである。こうして地球と海を治め、弟たちもかれに従った。

要旨解説

現代の長子相続制、すなわち長子による相続法は、マハーラージ・ユディシュティラが地球と海を統治していた時代にもありました。当時はハスティナープラ（現在のニューデリー）の王が世界の皇帝であり、海を含めた全土を治め、それはマハーラージ・ユディシュティラの孫のマハーラージャ・パリークシットの時代までつづいています。マハーラージ・ユディシュティラの弟たちは大臣や指揮官として働き、信心深い兄弟たちは揺るぎない協力関係で結ばれていました。マハーラージ・ユディシュティラは理想の王であり、主シュリー・クリシュナの代表者として地球という王国を治めていましたが、天国の惑星の代表者であるインドラ王とも比較されることがあります。インドラ、チャンドラ、スーリヤ、ヴァルナ、ヴァークなどの半神は、宇宙の各惑星を代表する王であり、またマハーラージ・ユディシュティラもそのなかのひとりと数えられ、地球を治めていました。民主主義と言いつつ、知識も理解もなく国を治める現代の政治指導者とはまったく違います。ビーシュマデーヴァや完全無欠の主から教えを授かった人物ですから、完璧な知識をすべて知っていました。

選挙で選ばれたいまの行政官は人形です。王としての力量がまったくないからです。マハーラージ・ユディシュティラのように啓発されたとしても、立場に縛られているために、自分の意志ではなにもできません。その結果、考え方の違いや自己中心的動機がもつて多くの国が衝突しています。しかしマハーラージ・ユディシュティラのような王に自分勝手な考えはありません。完全無欠の主の教え、主の代表者、そして権威ある代理者ビーシュマデーヴァの教えに従ってさえいればよかったです。シャーストラ (*śāstra*) では、個人的動機や勝手な考えを捨てて、偉大な権威者や完全無欠の主に従わなくてはならない、と説かれています。だからこそマハーラージ・ユディシュティラは海を含む全世界を治めることができたのです。その原則が完璧であり、だれにでも当てはまるからです。ひとつの世界という考えは、正しい判断のできる権威者に従ってこそ実現できるものです。不完全

な人間は、だれもが従える道をしめすことはできません。完璧で完全無欠の人物だけが、どの場所にも当てはまり、世界中のだれもが従える計画を作ることができます。治めるのは人物であり、姿や形のない政府ではありません。指導者が完璧なら政府も完璧で、愚か者ならその政府は愚者のパラダイスになるに決まっています。それが自然の法則です。不完全な王や行政者の実例はいくらでもあります。ですから、行政官たる者は、マハーラージ・ユディシュティラのように訓練を受け、世界を治める圧倒的な力をそなえなくてはなりません。ひとつの世界の観念は、マハーラージ・ユディシュティラのような完璧な王の政権でこそ実現されます。当時の人々は、マハーラージ・ユディシュティラのような王が世界を治めていたからこそ、幸せに生きることができたのです。

第4節

कामं ववर्ष पर्जन्यः सर्वकामदुग्धा मही ।
सिषिचुः स्म ब्रजान् गावः पयसोधस्वतीर्मुदा ॥ ४ ॥

カーマンム ヴァヴァルシャ パルジャニヤハ
kāmam vavarṣa parjanyaḥ

サルヴァ・カーマ・ドウガハー マヒー
sarva-kāma-dughā mahī

シシチュフ スマ ヴラジャーン ガーヴァハ
siṣicuḥ sma vrajān gāvaḥ

パヤソードハスヴァティール ムダー
payasodhasvatīr mudā

kāmam—必要な物資すべて; *vavarṣa*—降らせた; *parjanyaḥ*—雨; *sarva*—すべて; *kāma*—必需品; *dughā*—生産者; *mahī*—土地; *siṣicuḥ sma*—濡らす; *vrajān*—牧草地; *gāvaḥ*—牛; *payasā udhasvatīḥ*—ミルクで膨れた乳房のために; *mudā*—幸せな気持ちのために。

マハーラージ・ユディシュティラが国を治めていたとき、雲は人々が必要としていた水を十分に降らせ、大地は人類の必需品を豊富に作りだしていた。雌牛たちは幸せな気持ちに浸っていたので、その豊かな乳房からこぼれおちる牛乳で牧草地を濡らしていた。

要旨解説

経済発展の基本原則は土地と牛です。社会に必要なものは、穀物、ミルク、鉱物、衣服、木材などで、だれでも、体の要求を満たすためにこのような物資が必要とされます。肉、魚、鉄の道具や機械などが必要ではないことはあきらかです。マハーラージ・ユディシュ

ティラの統治時代、世界には雨が規則的に降っていました。雨は人間に支配できません。天国に住むインドラデーヴァは雨を支配し、また主の召使いでもあります。王が、そして王に統治される臣民が主に服従すれば、空から規則的に雨が降り、その雨が大地のさまざまな生産物を作りだしてくれます。規則的な雨は穀物やくだものを豊富に作りだし、また星々の影響力と相まって、貴重な宝石や真珠が作りだされます。穀物や野菜は人間や動物の豊かな食料となり、よく肥えた牛は、気力や活力を供給するミルクを私たちに豊富に提供してくれます。十分な牛乳、穀物、くだもの、綿、絹、宝石などがあつたら、映画や売春窟、屠殺場があるでしょうか。映画、車、ラジオ、肉、ホテルなど、そのような不自然なぜいたくな生き方はたして必要でしょうか。現代文化は、個人と国家が争う原因だけを作りだした、とは言えないでしょうか。平等とか同胞愛を高めているとはいっても、そのじつ、個人の気まぐれから多くの人を悲惨な工場や戦場に駆りだしているのではないのでしょうか？

この節にあるように、牛たちの乳房はミルクを豊かに含み、そして幸福感につつまれていたため、あふれだすミルクで牧草地を濡らしていました。ですから、牛たちには牧草地でたくさん草を食べさせて幸せに暮らせるよう見守ってあげる必要があると思いませんか？ 人間の身勝手な目的で牛たちを殺す必要がどこにあるのでしょうか。混ぜ合わせて調理すれば何百何千というおいしい料理が作られる穀物、くだもの、ミルクで満足すべきではありませんか。なにも悪いことをしていない動物たちを殺す屠殺場が、どうして世界中に作られているのでしょうか。マハーラージャ・パリークシットの孫のマハーラージ・ユディシュティラは、広大な王国を旅していたとき、黒い肌の人間が牛を殺そうとしているのを見つけました。王はすぐにその虐殺者を捕らえ、十分に罰しました。王や国の指導者は、自分では身を守ることでできないかわいそうな動物たちの命を守るべきではないのでしょうか。殺すのが人間性でしょうか？ 動物も国民ではありませんか？ 国民なら、なぜ屠殺場で組織的に殺されるのが許されるのでしょうか？ それを平等、同胞愛、非暴力とでも言うのですか？

ですから、この現代的・先進的・文化的といわれる政府と比べれば、マハーラージ・ユディシュティラのような君主制は、動物を殺したり、動物以下の人間が、別の動物以下の人間に投票で選ばれたりするような民主主義よりもはるかに優れていることがわかります。

私たち物質自然界の生物です。『バガヴァッド・ギーター』では、主がその種を与えた父親で、物質自然があらゆる種類の生物の母親である、とされています。ですから、母なる物質自然は、父なる全能者・シュリー・クリシュナの恩寵をとおして、動物にも人間にも十分な食糧を用意しています。人間は、他の生物たちの兄です。動物たちよりも優れた知性が与えられ、自然の法則や全能の父の教えが理解できます。人間文化は自然界の産物に依存すべきであり、倒錯した贅沢と感覚満足のためだけに経済発展をむやみに求め、世界を忌まわしい貪欲と権力の錯乱状態に陥れてはなりません。それでは犬や豚の生活と

変わりがないのです。

第5節

नद्यः समुद्रा गिरयः सवनस्पतिविरुधः ।
फलन्त्योषधयः सर्वाः काममन्वृत्तु तस्य वै ॥ ५ ॥

ナデヤハ サムドウラー ギラヤハ
nadyaḥ samudrā girayaḥ

サヴァナスパティ・ヴィールダハハ
savanaspati-vīrudhaḥ

パハランティ オーシャダハヤハ サルヴァーハ
phalanty ośadhayaḥ sarvāḥ

カーマンム アンヴリトウ タッシャ ヴアイ
kāmam anvṛtu tasya vai

nadyaḥ—川; *samudrāḥ*—海; *girayaḥ*—丘や山; *savanaspati*—野菜; *vīrudhaḥ*—つる草;
phalanti—機能的; *ośadhayaḥ*—薬; *sarvāḥ*—すべて; *kāmam*—必要性; *anvṛtu*—季節の;
tasya—王のために; *vai*—確かに。

川、海、丘、山、森、つる草、薬草などが、季節をとおして、自分たちに課せられた税として王に余るほどに貢献した。

要旨解説

マハーラージ・ユディシュティラはアジタ (*ajita*) 完全無欠の主を守られていたため、この節の説明のように、主の所有物、すなわち川、海、丘、森などがすべて喜びに満ち、各自の税として王に自らをささげました。成功の秘訣は、至高主の保護に身をまかせることにあります。主の許しがなければなにも達成できません。道具や機械の力に頼って努力して経済を発展させても、それですべてが満たされるわけではありません。至高主の許可が必要なのであり、それがなければ、どれほどの道具を使ってもすべては失敗するばかりです。成功の究極原因はダイヴァ (*daiva*) ・至高者です。マハーラージ・ユディシュティラのような王は、「王とは一般大衆の幸福のために働く至高主の代理者である」ということをよく知っています。結局、国は至高主のものであります。川、海、森、丘、薬草など、どれも人間が作りだしたものではありません。すべて至高主の創造物であり、私たちは、主への奉仕のために主の所有物を使うことを許されているのです。よく口にされるスローガンは、「すべては人々のためにある」と謳われ、政府も人民のために、人民によって動かされています。しかし、神の意識と人間生活の完成にもとづいて、つまり神の所有物を共有

するという神聖な共産主義にもとづいて新しい人間社会を作り出すためには、世界はマハーラーヂ・ユディシュティラやマハーラージャ・パリークシットのような王の足跡に従わなくてはなりません。主が配慮しているからこそ世界にはすべてが十分にあり、人間同士の敵意、動物と人間の敵意、あるいは動物と自然の敵対もなく、それらを正しく使って快適に暮らすことができます。主の支配はすみずみに行き届き、主が満足すれば自然界のすべても満足します。川は豊かに流れ、土地を肥やします。海は十分な量の鉱物、真珠、宝石を産出します。森は十分な木材、薬草、野菜を提供し、さまざまな季節は私たちがくだものや花を豊富に生産できるよう力を貸してくれます。工場や道具に頼るといふ不自然な生活は、膨大な資金を使って限られた人々だけに幸福を提供します。大衆の力が工場での生産に使われ、自然な産出が妨げられるために、大衆は幸福になれません。人々は適切な教育を受けていないために、自然の資源を搾取しながら、他人から与えられた関心事を満たすために働いており、その結果、個人と個人、国家と国家のあいだで深刻な競争が起っています。主の訓練を受けた代理者による正しい管理体制は、いまどこにもありません。私たちは、この節の記述を照らしあわせて現代文化の欠陥を調べ、マハーラーヂ・ユディシュティラの足跡に従い、そして人間社会にある穢れを清めて時代錯誤を取りはらわなくてはなりません。

第6節

नाधयो व्याधयः चो शा दैवभूतात्महेतवः ।
अजातशत्रावभवन् जन्तूनां राज्ञि कर्हिचित् ॥ ६ ॥

ナーダハヨー ヴァーダハヤハ クレーシャー
nādhayo vyādhayaḥ kleśā

ダイヴァ・ブフタートウマ・ヘータヴァハ
daiva-bhūtātma-hetavaḥ

アジャータ・シャトウラーヴ アバハヴァン
ajāta-śatrāv abhavan

ジャントゥーナーム ラーギ カルヒチトゥ
jantūnām rājñi karhicit

na—決して～ない; ādhayaḥ—不安; vyādhayaḥ—病気; kleśāḥ—過度の暑さ寒さによる問題; daiva-bhūta-ātma—肉体、超自然の力、他の生命体によるすべて; hetavaḥ—～の原因による; ajāta-śatrau—まったく敵を持たない者に; abhavan—起こる; jantūnām—生命体の; rājñi—王に; karhicit—いつでも。

王にまったく敵がいなかったために、どの生物も、心の苦しみ、病気、酷暑酷寒に乱される

ことがなかった。

要旨解説

人類には暴力をふるわない、そのいっぽうで哀れな動物の殺戮者や敵になるのは悪魔の哲学です。現代人は動物たちをないがしろにし、そのために哀れな動物たちはいつもおびえています。哀れな動物たちの心の動きは人間社会にのしかかり、人間社会は個人的・集団的・国家的規模の寒々しい、そしてただならぬ緊張感にさらされています。マハーラーヂ・ユディシュティラの時代には、従属する関係にあった国はありましたが、1つの国名のもとで治められていました。全世界が統一され、訓練を受けたユディシュティラ王のような人物が君臨し、住民をあらゆる不安、病気、酷暑酷寒から守っていました。経済的に恵まれていただけではなく、だれもが健康で、自然の力に苦しめられることなく、他の生物からの危害もなく、体や心のために苦しめられることはありませんでした。ベンガル語のことわざでは、邪悪な王が国を破滅させ、悪妻が家族を破滅させる、とされています。この真理はこの節を見ても明らかです。王は敬虔で、神や聖者に従順で、だれの敵でもなく、主の代理者として認められ、だからこそ主に守られているため、王の保護下にあるすべての国民は主に守られ、さらに主の権威ある代理者に直接守られていました。敬虔で主に認められていなければ、自分に従う人々を幸せにすることはできません。人間と神、人間と自然のあいだには完全な協調関係があり、互いに助けあえば、ユディシュティラ王がしめしたように、世界は幸福・平和・繁栄につつまれます。いまでは当然のようにおこなわれている互いを食い物にする風潮は、社会に苦しみを作り出すだけです。

第7節

उषित्वा हास्तिनपुरे मासान् कतिपयान् हरिः ।
मुहृदां च विशोकाय स्वसुश्च प्रियकाम्यया ॥ ७ ॥

ウシトウヴァー ハースティナプレー
uṣitvā hāstinapure

マーサーン カティパヤーン ハリヒ
māsān katipayān hariḥ

スフリダーンム チャ ヴィショーカーヤ
suhṛdān̄m ca viśokāya

スヴァスシュ チャ プリヤ・カーミヤヤー
svasuś ca priya-kāmyayā

uṣitvā—留まっている； *hāstinapure*—ハスティナープレーの都に； *māsān*—月；

katipayān—2、3の; hariḥ—主シュリー・クリシュナ; suhr̥dām—親族たち; ca—もまた; viśokāya—彼らを慰めるために; svasuḥ—妹; ca—そして; priya-kāmyayā—喜ばせるために。

シュリー・ハリ、主シュリー・クリシュナは親族や妹（スバドゥラー）を慰めるために、数ヶ月間ハスティナープラに留まった。

要旨解説

クリシュナは、クルクシェートラの戦いが終わってユディシュティラが王座についたあと、自分の国のドウヴァーラカーに出立するつもりでしたが、マハーラージ・ユディシュティラのたつての願いに答え、そしてビーシュマデーヴァに特別の慈悲を授けるために、パンドヴァ兄弟の都であるハスティナープラに留まりました。主は、悲しみに暮れる王を慰め、そして特に、妹のスバドゥラーを喜ばせるために留まることにしました。スバドゥラーは、一人っ子で、しかも結婚したばかりのアビマンニユを失っていたことから、特に主クリシュナに慰められました。アビマンニユは妻ウッタラー（Uttarā）というマハーラージャ・パリークシットの母親を残して戦死しました。主は、できるかぎりのことをして献愛者を満足させたいと考えます。主は絶対的な方なのです。

第8節

आमन्त्र्य चाभ्यनुज्ञातः परिष्वज्याभिवाद्य तम् ।
आरुरोह रथं कैश्चित्परिष्वक्तोऽभिवादितः ॥ ८ ॥

アーマントウリヤ チャービヤヌギヤータハ
āmantrya cābhyanujñātaḥ

パリスヴヴァッジャヤービヒヴァーデヤ タンム
pariṣvajyābhivādya tam

アールローハ ラタハンム カイシュチトウ
āruroha ratham kaiścit

パリスヴヴァクトー ビヒヴァーディタハ
pariṣvaktō 'bhivāditaḥ

āmantrya—許可を求めて; ca—そして; abhyanujñātaḥ—許可を得て; pariṣvajya—抱擁; bhivādya—足下にひれ伏して; tam—マハーラージ・ユディシュティラに; āruroha—乗った; ratham—馬車; kaiścit—だれかに; pariṣvaktāḥ—抱擁されて; bhivāditaḥ—お辞儀を受けて。

そして主は出立の許可を求め、マハーラーヂ・ユディシュティラがその依頼に応えた。ユディシュティラ王の足元にひれ伏して敬意を表する主を、王は抱擁した。このあと主は、多くの人々に抱きしめられ、また敬意を受け、馬車に乗った。

要旨解説

マハーラーヂ・ユディシュティラは主クリシュナの年上のいここにあたるため、離れるときに王の足元にお辞儀をしました。王は主が至高人格主神であることをよく知っていましたが、弟のように抱擁しました。主は、愛する献愛者によって、まるで身分の低い者のように扱われるときに喜びを感じます。主より偉大か、主と同じ境地の者はだれもいませんが、献愛者から若輩のように接してもらうことに喜びを感じます。これはすべて主の崇高な楽しみのひとつです。非人格論者は献愛者が演じる超越的な役割が理解できません。主はマハーラーヂ・ユディシュティラに挨拶したあと、同じ年代のビーマとアルジュナを抱きしめましたが、主より若かったナクラとサハデーヴァは、主にひれ伏して敬意を表しました。

第9－10節

सुभद्रा द्रौपदी कुन्ती विराटतनया तथा ।
गान्धारी धृतराष्ट्रश्च युयुत्सुर्गौतमो यमौ ॥ ९ ॥
वृकोदरश्च धौम्यश्च स्त्रियो मत्स्यसुतादयः ।
न सेहिरे विमुह्यन्तो विरहं शर्धाधन्वनः ॥ १० ॥

スバハドゥラー ドウラウパディー クンティー
subhadrā draupadī kuntī

ヴィラータ・タナヤー タタハー
virāṭa-tanayā tathā

ガンダハーリー ドウリタラーシュトウラシュ チャ
gāndhārī dhṛtarāṣṭraś ca

ユユトウスル ガウタモー ヤマウ
yuyutsur gautamo yamau

ヴリコーダラシュ チャ ダハウミヤシュ チャ
vṛkodaraś ca dhaumyaś ca

ストウリヨー マトウツシャ・スターダヤハ
striyo matsya-sutādayaḥ

ナ セーヒレー ヴィムッヒヤントー
na sehire vimuhyanto

ヴィラハム シャールンガ・ダハンヴァナハ
viraham śārṅga-dhanvanah

subhadrā—クリシュナの妹; draupadī—パーンダヴァ兄弟の妻; kuntī—パーンダヴァ兄弟の母; virāṭa-tanayā—ヴィラータの娘（ウッタラー）; tathā—もまた; gāndhārī—ドゥリヨーダナの母; dhṛtarāṣṭrah—ドゥリヨーダナの父; ca—そして; yuyutsuḥ—ドゥリタラーシュトラがヴァイシャの妻との間にもうけた子; gautamaḥ—クリパーチャーリヤ; yamau—双子の兄弟ナクラとサハデーヴァ; vṛkodaraḥ—ビーマ; ca—そして; dhaumyaḥ—ダウミヤ; ca—そして; striyaḥ—そして宮殿にいた婦女たち; matsya-sutā-ādayaḥ—漁師の娘（サチャヴァティー、つまりビーシュマの継母）; na—できなかった; sehire—耐える; vimuhyantaḥ—氣を失いかけて; viraham—別れ; śārṅga-dhanvanah—手にホラ貝を持つシュリー・クリシュナ。

そのとき、スバドゥラー、ドゥラウパディー、クンティー、ウッタラー、ガンダーリー、ドゥリタラーシュトラ、ユウトウス、クリパーチャーリヤ、ナクラ、サハデーヴァ、ビーマセーナ、ダウミヤ、サチャヴァティーたちは氣を失いかけた。主クリシュナとの別れに耐えきれなかったのである。

要旨解説

主シュリー・クリシュナは生命体たちに、特に献愛者たちにとってこのうえなく魅力的な方であり、主と離れることには耐えられません。幻想エネルギーの魔力にとらわれている条件づけられた魂は主を忘れていますが、主を悟っている魂は主のことは一瞬たりとも忘れられません。そのような惜別の思いを言葉で言いつくすことはできませんし、またその思いは献愛者にしかわかりません。主がヴリンダーヴァンを離れたあと、純朴で田舎育ちの牛飼いの少年や少女、女性やその他すべての人たちは、その後の生涯を別れの辛さを感じながら過ごしました。牛飼いの乙女のなかでもクリシュナをもっとも愛していたラーダーラーニーの悲しみは筆舌につくしがたいものです。ヴリンダーヴァンの人々は月食のときにクルクシュートラで再会し、哀切きわまりない思いをクリシュナに告げました。もちろん、超越的な献愛者たちの思いはそれぞれ異なりますが、直接会ったことのある献愛者はもちろん、そうではない献愛者でも、一瞬たりとも主から離れることはできません。それが純粋な献愛者の心情なのです。

第 11 - 12 節

सत्स्रान्मुक्तदुःस्रौ हातुं नोत्सहते बुधः ।
कीर्त्यमानं यशो यस्य सकृदाकर्ण्य रोचनम् ॥ ११ ॥

तस्मिन्न्यस्तधियः पार्थाः सहेरन् विरहं कथम् ।

दर्शनस्पर्शसंलापशयनासनभोजनैः

॥ १२ ॥

サトウ・サンガーン ムクタ・ドゥフサンゴ
sat-saṅgān mukta-duḥsaṅgo

ハートウナム ノートウサハテー ブダハハ
hātum notsahate budhaḥ

キールチャマーナム ヤショー ヤッシャ
kīrtyamānam yaśo yasya

サクリドゥ アーカルニャ ローチャナム
sakṛd ākarṇya rocanam

タスミン ニヤスタ・ディヤハ パールタハーハ
tasmin nyasta-dhiyaḥ pārthāḥ

サヘーラン ヴィラハンム カタハンム
saheran viraham katham

ダルシャナ・スパルシャ・サンムラーパ・
darśana-sparśa-samlāpa-

シャヤナーサナ・ボホージャナイヒ
śayanāsana-bhojanaiḥ

sat-saṅgāt—純粋な献愛者との交流によって; *mukta-duḥsaṅgaḥ*—悪質な物質的交流のない; *hātum*—捨てるために; *na utsahate*—決して試みない; *budhaḥ*—主を理解した者; *kīrtyamānam*—讃えること; *yaśaḥ*—名声; *yasya*—～である者の; *sakṛt*—1度だけ; *ākarṇya*—聞くだけ; *rocanam*—心地よい; *tasmin*—主に; *nyasta-dhiyaḥ*—自分の心を主に捧げた者; *pārthāḥ*—プリターの子息たち; *saheran*—耐えられる; *viraham*—別れ; *katham*—どうやって; *darśana*—顔を顔を見合わせる; *sparśa*—触れること; *samlāpa*—言葉をお互に交わすこと; *śayana*—眠ること; *āsana*—座ること; *bhojanaiḥ*—共に食事をすること。

純粋な献愛者と交流し、至高主を理解して物質的で不適切な交流から解放された賢者は、1度だけでも主の栄光を聞いてその甘露を味わったあとは、その栄光を聞かずにはいられなくなる。ならば、どうしてパーンダヴァ兄弟たちが主との別れに耐えられようか？ 主と親密につきあい、差し向かい、主の体に触れ、言葉を交わし、主と眠り、座り、食事をともにしてきたのである。

要旨解説

自分よりも優れた者に仕えるのが、生命体の本質的な立場です。さまざまな感覚満足で現われる幻想の物質的エネルギーに、どうしても仕えなくてはならないということです。そして、感覚に仕えても飽くことはありません。飽いたとしても、幻想の力は、尽きることなく、有無をいわず、満足させることなく、私たちを感覚に仕えさせようとしめます。感覚満足の行為に終わりはなく、条件づけられた魂は解放される希望もなく、囚人のように操られます。救われる可能性は、純粋な献愛者との交流しかありません。その交流によって、自分本来の超越的な意識にじょじょに高められていきます。やがて、主に仕えることが自分の永遠な立場であり、欲情、怒り、世界を支配する望みという歪んだ感覚に操られてはならないことを悟ります。物質的社会、友人関係、愛情は、どれも姿を変えた欲情です。家庭、国、家族、社会、富、それらにかかわる物事は、必ず三重の苦しみがある物質界での束縛の原因です。純粋な献愛者と交流し、話を素直に聞くうちに物質的楽しみに対する執着は弱まり、主の崇高な活動について聞こうとする思いが強くなっていきます。ひとたびその状態になれば、その思いは導火線のように留まることなく進んでいきます。人格主神ハりは超越的な魅力をそなえているため、自己を悟り、自己のうちで満たされている人でも、物質的束縛から完全に解放され、献愛者に変貌します。このような背景がわかっていたら、主といつも行動をともにしてきたパーンダヴァ兄弟の境地はかんたんに理解できます。シュリー・クリシュナとじかにふれあっていたかれらの主への思いは強く、離れることさえ考えられませんでした。献愛者は、主の姿、質、名前、名声、崇高な娯楽などに惹きつけられ、俗界にある姿、質、名前、名声、活動などいっさいを忘れ、そして、純粋な献愛者と高尚な交流に満たされているため、ほんの一瞬でさえも主から離れることができません。

第13節

सर्वे तेऽनिमिषैरक्षैस्तमनुद्रुतचेतसः ।
वीक्षन्तः स्नेहसम्बद्धा विचेलुस्तत्र तत्र ह ॥ १३ ॥

サルヴェー テー ニミシャイル アクシャイス
sarve te 'nimiṣair akṣais

タナム アヌ ドウルタ・チェータサハ
tam anu druta-cetaṣaḥ

ヴィークシャンタハ スネーハ・サンムバッドハー
vikṣantaḥ sneha-sambaddhā

ヴィチェールス タトゥラ タトゥラ ハ
vicelus tatra tatra ha

sarve—全員; te—彼ら; animiṣaiḥ—まばたきもせずに; akṣaiḥ—目で; tam anu—主を求

めて; *druta-cetasah*—溶けた心; *vikṣantaḥ*—主を見つめている; *sneha-sambaddhāḥ*—純粋な愛着によって; *viceluh*—動き出した; *tatra tatra*—ここかしこと; *ha*—彼らはそうした。

かれらの心は主への魅力ゆえに溶け、われを忘れた。まばたきもせずに主を見つめ、心乱れてここかしこと歩くばかりであった。

要旨解説

クリシュナはすべての生命体にとって魅力的な方であり、それは自然な感情のあらわれです。主はすべての永遠なる魂の筆頭の魂だからです。主ひとりが無数の永遠の魂を養っています。『カタ・ウパニシャッド』がそう述べており、主との永遠の絆を取りもどすことでつぎることのない平和と繁栄を手に入れることができます。いまはその絆が、主の幻想エネルギーであるマーヤーの魔力のために忘れられています。ひとたびその絆がわからずかでも甦れば、条件づけられた魂はすぐに物質エネルギーの幻想から解放され、主との交流を求めるようになります。この交流が可能になるのは、主との個人的な交流だけではなく、主の名前、名声、姿、質などをとおしてもできます。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、純粋な献愛者の話を謙虚に聞く方法をとおして条件づけられた魂を訓練し、完成境地に導きます。

第 1 4 節

न्यरुन्धनुद्गलद्वाष्पमौत्कण्ठ्याद्देवकीसुते ।
निर्यात्यगारान्नोऽभद्रमिति स्याद्बान्धवस्त्रियः ॥ १४ ॥

ニヤルンダハン— ウドゥガラドゥ バーシュパンム
nyarundhann udgalad bāṣpam

アウトウカンチャードゥ デーヴァキー・ステー
autkaṅṭhyād devakī-sute

ニリヤーティ アガーラーン ノー バドゥランム
niryāty agārān no 'bhadram

イティ シャードゥ バンダハヴァ・ストウリヤハ
iti syād bāndhava-striyaḥ

nyarundhan—けんめいにこらえている; *udgalat*—流れ出している; *bāṣpam*—涙; *autkaṅṭhyāt*—大きな不安のため; *devakī-sute*—デーヴァキーの子に; *niryāti*—出て来て; *agārāt*—宮殿から; *naḥ*—ではない; *abhadram*—不吉; *iti*—そうして; *syāt*—起こるように; *bāndhava*—親族; *striyaḥ*—女性たち。

女性の親族たちは宮殿から出てきたが、クリシュナを思って心乱れ、目には涙があふれていた。けんめいに涙をこらえていたかのじよたちだったが、その涙が出立を不吉なものにするのではないかと恐れていたのである。

要旨解説

ハスティナープラの宮殿には何百人もの女性たちが住んでいました。そのだれもがクリシュナに強い愛着を感じていました。親戚関係にもありました。かのじよたちは、クリシュナが宮殿を離れて生まれ故郷に行こうとすることを見て、主のことが心配でならず、自然に涙がほほをつたいました。しかし、その涙がクリシュナに不運をもたらしてしまうのでは、とも心配していたため、なんとかこらえていたのです。もちろん、涙をこらえることは難しいことでしたから、心かきむしられる思いで涙をぬぐい、忍びなくのでした。そのため、戦死した兵士たちの妻や義理の娘たちはクリシュナに会おうとはしませんでした。それでも、主のしたことを聞いて知っていましたから、主のことを考え、主の名前、名声などを話し、クリシュナと直接かかわっていた人たちのように愛着を感じるようになっていました。ですから、直接でも間接でも、クリシュナのことを考えたり、クリシュナについて話したり、あるいは崇拜すれば主に心奪われるようになるのです。クリシュナは絶対的な方ですから、主の名前、姿、質など、どれも違いはありません。クリシュナとの親密な絆は、主について話し、主について聞き、主を思いだすことで、内から甦ります。精神的力ゆえに、それが可能になるのです。

第 15 節

मृद्राशङ्खभेर्यश्च वीणापणवगोमुखाः ।
धुन्धुर्यानकघण्टाद्या नेदुर्दुन्दुभयस्तथा ॥ १५ ॥

ムリダンガ・シャンカハ・ベヘリヤシュ チャ
mṛdaṅga-śaṅkha-bheryaś ca

ヴィーナー・パナヴァ・ゴムカハーハ
vīṇā-panava-gomukhāḥ

ドゥンドウリ・アーナカ・ガハントーデヤー
dhundhury-ānaka-ghanṭādyā

ネードウル ドゥンドウバハヤス タタハー
nedur dundubhayas tathā

mṛdaṅga—心地よい音の太鼓; *śaṅkha*—ホラ貝; *bheryaḥ*—吹奏楽団; *ca*—そして;
vīṇā—弦楽器楽団; *panava*—横笛; *gomukhāḥ*—別種類の横笛; *dhundhuri*—別種類の太鼓;

ānaka—ケトル; ghaṇṭā—ベル; ādyāḥ—その他; neduḥ—演奏された; dundubhayaḥ—別種類の太鼓; tathā—その時。

主がハスニナープラの宮殿を離れるとき、数々の太鼓——ムリダンガ、ドーラ、ナグラ、ドウンドウリー、ドウンドウビ——が、そしてさまざまな横笛、ヴィーナー、ゴームカ、ベリーなどが一斉に演奏され、主を讃えた。

第 16 節

प्रासादशिखरारूढाः कुरुनार्यो दिदृक्षया ।
ववृषुः कुसुमैः कृष्णं प्रेमव्रीडास्मितेक्षणाः ॥ १६ ॥

プラーサーダ・シカハラールーダハーハ
prāsāda-sikharārūdhāḥ

クル・ナーリョー デイドウリクシャヤー
kuru-nāryo didṛkṣayā

ヴァヴリシュフ クスマイヒ クリシュナンム
vavṛṣuḥ kusumaiḥ kṛṣṇam

プレーマ・ヴリーダー・スミーテークシャナーハ
prema-vṛīḍā-smitekṣaṇāḥ

prāsāda—宮殿; *sikhara*—屋上; *ārūdhāḥ*—昇っている; *kuru-nāryaḥ*—クル王家の女性たち; *didṛkṣayā*—見ている; *vavṛṣuḥ*—降らせた; *kusumaiḥ*—花で; *kṛṣṇam*—主クリシュナに; *prema*—愛着と愛情から; *vṛīḍā-smita-ikṣaṇāḥ*—恥じらいの微笑みを浮かべて見つめている。

クル王家の女性たちは、主を見ようとする熱い望みを感じながら宮殿の屋上に昇り、愛情と恥じらいのほほえみを浮かべ、主に花びらを降らせた。

要旨解説

恥じらいは女性が特にそなえている自然な美しさで、男性の敬意をほしいままにすることが出来ます。男女の関係については、『マハーバーラタ』の時代、すなわち5000年以上まえにも守られていました。女性と男性は一定の距離を置くという習慣はインドのイスラム時代に始まった、とするのは世界の歴史を知らない人の言うことです。『マハーバーラタ』時代のこの出来事から、宮殿の女性たちがパルダー (*pardā*) という「男性との交流の決まり事」を守っていたことがわかります。だからこそ、主クリシュナや多くの人々があつまっていた屋外に出ずに宮殿の屋上にのぼり、そこから花びらを降らせて主クリシュナ

に敬意をしめした、ということです。この節で明言されているように、宮殿の屋上にいた女性たちは恥じらいの微笑みを浮かべていました。この恥じらいは、女性がそなえた自然な贈り物であり、身分が低くても、それほど魅力的ではなくても、女性の美しさや信望を引きたたせます。これはだれでも知っていることです。道をそうじる女性でも、女性らしい恥じらいを見せると、立派な紳士でもその女性に敬意をしめします。いっぽう、裸同然のかつこうで道を闊歩する女性にはだれも敬意を払いませんが、恥じらいを見せる掃除婦でも人の敬意を集めます。

インドの聖者が考えていたように、人類文化は人を幻想の束縛から解放させるためにあります。女性の物質的な美しさは幻想です。肉体そのものが土、水、火、空気などで作られているからです。命のある火花と物質がかかわっているために「美しく」見えるということです。人の気を引くようみごとに作られていても、それが土の人形なら、だれも心をうばわれることはないでしょう。どれほど美しい女性の体でも、死んでいればだれも受けとりません。死体に美しさなどないからです。ですから結論として、精神的火花こそが美しいのであり、またその魂の美しさゆえに、私たちは外側の肉体の美しさに惹かれる、と言えます。ですからヴェーダ知識は、いつわりの美しさに心を奪われてはならない、と戒めています。しかし、いま私たちは無知の暗闇に閉じこめられているため、ヴェーダ文化は、女性と男性の交わりではきびしい制限をもうけて、一定のつきあいを許しています。たとえば、女性は火、男性はバターと表現されています。バターは火に近づければ溶けてしまうため、バターと火は必要なときにだけ混ぜる、という解釈になります。そして、恥じらいは無制限の交わりを止める役割をはたします。自然な贈り物ですから、適切に使わなくてはなりません。

第 17 節

सितातपत्रं जग्राह मुक्तादामविभूषितम् ।
रत्नदण्डं गुडाकेशः प्रियः प्रियतमस्य ह ॥ १७ ॥

シタータパトウランム ジャグラハ
sitātapatram jagrāha

ムクターダーマ・ヴィブフーシタンム
muktādāma-vibhūṣitam

ラトウナ・ダンダンム グダーケーシャハ
ratna-daṇḍam guḍākeśaḥ

プリヤハ プリヤタマツシャ ハ
priyaḥ priyatamasya ha

sita-ātapatram—やすらぎを与える日傘; *jagrāha*—持つて; *muktā-dāma*—レースと真

珠で飾られた; *vibhūṣitam*—刺繍された; *ratna-daṇḍam*—宝石の柄のついた; *guḍākeśaḥ*—アルジュナ、熟達した戦士、そして眠りを征服した者; *priyaḥ*—もっと愛しい; *priyatamasya*—もっとも愛しい者の; *ha*—彼はそのようにした。

そのとき、偉大な戦士であり、眠りを征服し、至高主のもっとも愛しい親密な友人アルジュナは、宝石の柄がつき、レースと真珠で刺繍された日傘をかかげた。

要旨解説

金、真珠、高価な石は、絢爛豪華な王家の儀式に使われます。どれも自然からの贈り物であり、人類が「必需品」という口実で無駄な物を作って貴重な時間を無駄にしなければ、主の命令のもとで丘、海などから豊かに生産されます。いわゆる経済発展を遂げた結果、現代人は金、銀、銅のような金属の代わりにプラスチックの容器を使っています。純粋なバターの代わりにマーガリンが使われ、世界人口の4分の1の人々が住む家さえ持たない時代なのです。

第18節

उद्धवः सात्यकिश्चैव व्यजने परमाद्भुते ।
विकीर्यमाणः कुसुमै रेजे मधुपतिः पथि ॥ १८ ॥

ウツダハヴァハ サーツチャキシユ チャイヴァ
uddhavaḥ sātyakiś caiva

ヴァジャネー パラマドゥブフテー
vyajane paramādbhute

ヴィキーリャマーナハ クスマイ
vikīryamāṇaḥ kusumai

レージェー マドゥ・パティヒ パティ
reje madhu-patiḥ pathi

uddhavaḥ—クリシュナのいとこ; *sātyakiḥ*—主の御者; *ca*—そして; *eva*—確かに; *vyajane*—扇いでいる; *parama-adbhute*—装飾品; *vikīryamāṇaḥ*—散らばったものの上に座って; *kusumaiḥ*—あたり一面の花; *reje*—命じた; *madhu-patiḥ*—マドウの主(クリシュナ); *pathi*—道すがら。

ウツダヴァとサーチャキが鮮やかな装飾をほどこした扇で主をあおぎはじめた。降りそがれる花に飾られたマドウの主・主クリシュナはたとえようもない。

第 19 節

अश्रूयन्ताशिषः सत्यास्तत्र तत्र द्विजेरिताः ।
नानुरूपानुरूपाश्च निर्गुणस्य गुणात्मनः ॥ १९ ॥

アシュルーヤンターシシャハ サツテャース
aśrūyantāśiṣaḥ satyās

タトウラ タトウラ ドウヴィジェーリターハ
tatra tatra dvijeritāḥ

ナーヌルーパーヌルーパーシュ チャ
nānurūpānurūpāś ca

ニルグナッシャ グナートウマナハ
nirguṇasya guṇātmanaḥ

aśrūyanta—聞かれて; *āśiṣaḥ*—恩恵; *satyāḥ*—すべての真実; *tatra*—ここ; *tatra*—そこ; *dvija-īritāḥ*—博識なブラーフマナによって広められた; *na*—ではない; *anurūpa*—ふさわしい; *anurūpāḥ*—適切で; *ca*—もまた; *nirguṇasya*—絶対真理者の; *guṇa-ātmanaḥ*—一人の人間として行動している。

そこかしこから聞こえてくるクリシュナに向けられた恩恵の言葉は主にふさわしくもあり、またふさわしくもなかった。それはすべて、いま人間のひとりとして行動している絶対真理者のために向けられたものだからである。

要旨解説

そこかしこで、ヴェーダの恩恵が人格主神シュリー・クリシュナにむけて発せられました。その恩恵は、主がマハーラージ・ユディシュティラのいとこという「人間」として行動していることではふさわしいのですが、同時に、主は絶対的な方ですから、どのような物質的親族関係とはかかわりがないため、ふさわしくないととも言えます。主はニルグナ (*nirguṇa*)、つまり物質的な質とまったくかかわりなく、超越的な質をすべて備えている方です。超越的世界に矛盾するものはいっさいありませんが、相対的世界ではすべてに反対のものが存在します。相対的世界では、白は黒の正反対ですが、超越的世界では白と黒の違いはありません。ですから、博学なブラーフマナたちが主のまわりで唱えた恩恵の言葉は、絶対的人物に関連しては矛盾があるように見えますが、絶対的人物その方に向けられると、矛盾はなくなり、超越的になります。この考えをしめす例があります。主シュリー・クリシュナはときに泥棒と表現されることがあります。純粋な献愛者のあいだで主はマーカナ・チョーラ (*Mākhana-cora*) という名前がよく知られています。主はヴリンダーヴァンに住んでいた幼いころ、近所の家でバターをよく盗んでは食べていましたが、以

来、主は泥棒として知られるようになりました。しかし、泥棒として知られつつ、同時に泥棒としても崇拜されています。いっぽう、俗世界では泥棒は罰せられ、讃えられることもありません。主は絶対人格主神ですから、すべては主に適応され、またどれほどの矛盾があっても、主はやはり至人格主神なのです。

第20節

अन्योन्यमासीत्सञ्जल्प उत्तमश्लोकचेतसाम् ।
कौरवेन्द्रपुरस्त्रीणां सर्वश्रुतिमनोहरः ॥ २० ॥

アニョーニヤム アーシートウ サンジャルパ
anyonyam āsīt sañjalpa

ウッタマ・シュローカ・チェータサーナム
uttama-śloka-cetasām

カウラヴェーンドウラ・プラ・ストウリーナーナム
kauravendra-pura-strīṇām

サルヴァ・シュルティ・マノー・ハラハ
sarva-śruti-mano-haraḥ

anyonyam—互いに; *āsīt*—〜があった; *sañjalpaḥ*—話している; *uttama-śloka*—至高者、選り抜かれた詩歌によって讃えられる方; *cetasām*—心がそのように没頭している人々の; *kaurava-indra*—クル家の王; *pura*—首都; *strīṇām*—すべての女性; *sarva*—すべて; *śruti*—ヴェーダ; *manaḥ-haraḥ*—心にとって魅力的な。

ハスティナープラの宮殿の屋上にいた女性たちは、選りすぐられた詩歌で讃えられる主の超越的な質に心をうばわれ、主について話しはじめた。琴線に触れるかのじよたちの言葉はヴェーダ聖歌よりも魅力的だった。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』では、ヴェーダ経典を学ぶ目標は人格主神シュリー・クリシュナにあると述べられています。その言葉どおり、主の栄光はヴェーダ、『ラーマーヤナ』、『マハーバーラタ』のような文献で描写されています。また『シュリーマド・バーガヴァタム』では、とくに至高主について述べられています。ですから、クル王家の都に建つ宮殿の屋上にいた女性たちが主について話しあっていたとき、その会話はヴェーダ聖歌よりも心地よく響いていました。主を讃えて歌われるものはすべてシュルティ・マントラ (*Śruti-mantra*) です。ガウディヤー・サンプラダーヤのアーチャーリヤのひとりタークラ・ナローッタマ・ダースは、平易なベンガル語で詩を書いています。しかし、同じサン

プラダーヤの博識なアーチャーリヤであるタークラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティーは、その詩をヴェーダのマントラ同様の優れた詩として認めています。歌われている内容の素晴らしさゆえに讃えられているのです。重要なのは言語ではなく、その主題です。主の考えと活動に思いを寄せていた女性たちは、主の恩寵で、ヴェーダ知識の真髄を悟っていたのでした。だからこそ、サンスクリット語学者ではなかったものの、ヴェーダ聖歌に優る甘美な話題を語ることができました。ウパニシャッドにあるヴェーダ聖歌は、至高主について間接的に述べられることがあります。しかし、この女性たちは主その方について話しあっているのであり、そのために聞く者の心を喜びで満たしました。かのじよたちの言葉には、博識なブラーフマナが授ける恩恵に優る価値がこめられていたように思われます。

第 2 1 節

स वै किलायं पुरुषः पुरातनो
य एक आसीदविशेष आत्मनि ।
अग्रे गुणेभ्यो जगदात्मनीश्वरे
निमीलितात्मनिशि सुप्तशक्तिषु ॥ २१ ॥

サ ヴァイ キラーヤム プルシャハ プラータノ
sa vai kilāyaṁ puruṣaḥ purātano

ヤ エーカ アーシードウ アヴィシエーシャ アートウマニ
ya eka āsīd aviśeṣa ātmani

アグレー グネービョー ジャガドゥ・アートウマニシュヴァレー
agre guṇebhyaḥ jagad-ātmanīśvare

ニミーリタートウマン ニシ スプタ・シャクティシュ
nimilitātman niśi supta-śaktiṣu

saḥ—主（クリシュナ）；*vai*—私が記憶するように；*kila*—確かに；*ayam*—これ；*puruṣaḥ*—人格主神；*purātanaḥ*—根源の者；*yaḥ*—～である者；*ekaḥ*—一人だけ；*āsīt*—存在した；*aviśeṣaḥ*—物質的に表わされていない；*ātmani*—自分自身；*agre*—創造の前に；*guṇebhyaḥ*—自然の様式の；*jagat-ātmani*—超靈魂に；*īsvare*—至高主に；*nimilita*—～に没入して；*ātman*—生命体；*niśi supta*—夜に不活発の；*śaktiṣu*—そのエネルギーの。

女性たちが言う。「私たちがはっきり覚えているとおりに、いま、根源の人格主神がここにおられます。主だけが、自然の様式が表わされるまえに存在し、そして至高主だからこそ、生命体は主のなかに入り、夜眠るように、すべての動きを停止させます」

要旨解説

創造された宇宙は2通りの消滅をします。43太陽億年が終わるたびに、1つの宇宙の主であるブラフマーが眠るときに破壊が起こります。そして主ブラフマーの100年の生涯が終わるとき、太陽年の計算で $8,640,000,000 \times 30 \times 12 \times 100$ 年の終わりに全宇宙が完全に破壊されます。その2つの期間に、マハトウ・タットウヴァ (mahat-tattva) とジーヴァ・タットウヴァ (jiva-tattva) という2つのエネルギーが至高主のなかに入り、生命体は物質界が新しく創造されるまで主の体のなかで眠りつづけます。これが物質現象界の創造・維持・破壊の過程です。

物質創造は、主が機能させる物質自然の三様式の作用によって起こります。シュルティ・マントラには、ヴィシュヌ・至高主だけが創造のまえに存在し、そこにはブラフマーもシヴァも、ほかの半神も存在しなかった、と述べられています。このヴィシュヌは、原因の海に横たわっているマハー・ヴィシュヌ (Mahā-Viṣṇu) のことです。主の呼吸だけで全宇宙が種として作りだされ、やがてその宇宙のひとつひとつのなかに無数の惑星を含む巨大な形に発達していきます。宇宙の種は、ちょうど1本の菩提樹の種が無数の菩提樹に増えていくように、巨大な形になっていきます。

このマハー・ヴィシュヌは主シュリー・クリシュナの完全分身であり、『ブラフマ・サムヒター』で次のように述べられています。

「私は、根源の人格主神ゴーヴィンダに尊敬の礼を表す。主はマハー・ヴィシュヌの完全分身である。宇宙の生物の筆頭者であるすべてのブラフマーたちは、主の超越的体の毛穴から宇宙が放出されたあと、主が息を吐いているあいだけ生きつづける」(BS 第5章・第58節)

このように、ゴーヴィンダ、あるいは主クリシュナは、マハー・ヴィシュヌの源でもあります。このヴェーダの真理について話しあっている女性たちは、権威ある情報源から話を聞いたのでしょう。権威ある情報源だけが、超越的な主題を明確に知る唯一の方法です。ほかに方法はありません。

生命体がマハー・ヴィシュヌの体のなかに入ることは、ブラフマーの百年の生涯が終わるときに起こります。しかし、それで個々の生命体が個性を失うということではありません。個性はそのまま存在しつづけ、主の至高の意志によって新たに宇宙が創造されるとき、眠っていた、そして不活発だった生命体はふたたび外に出され、過去のさまざまな生活のつづきとして活動しはじめます。その状態を *suptothita naya* (スプトーッティタ ナヤ) 「眠りから覚め、各自の義務を遂行しはじめる状態」といいます。夜眠っているとき、だれでも自分のこと、自分の正体や義務、目覚めているときにかかわることすべてを忘れていきます。しかし、その眠りから覚めた瞬間、すべきことを思いだし、ふたたび自分の仕事を始めます。生命体も宇宙が破壊されたあとはマハー・ヴィシュヌの体のなかに入っていますが、

次の創造が起こるときに目覚め、やり残した仕事を始めるのです。このことは『バガヴァッド・ギーター』（第8章・第18-20節）でも確認されています。

主は創造のエネルギーが機能し始めるまえに存在していました。主は物質エネルギーの産物ではありません。主の体は完全に精神的であり、主の体と主自身に違いはいっさいありません。創造のまえ、主は絶対唯一の自分の住居にいました。

第22節

स एव भूयो निजवीर्यचोदितां
स्वजीवमायां प्रकृतिं सिमुक्षतीम् ।
अनामरूपात्मनि रूपनामनी
विधित्समानोऽनुससार शास्त्रकृत् ॥ २२ ॥

サ エーヴァ ブーヨー ニジャ・ヴィーリヤ・チョーディターンム
sa eva bhūyo nija-vīrya-coditām

スヴァ・ジーヴァ・マーヤーンム プラクリティンム シスリクシャティーンム
sva-jīva-māyām prakṛtiṁ sisṛkṣatīm

アナーマ・ルーパートウマニ ルーパ・ナーマニー
anāma-rūpātmani rūpa-nāmanī

ヴィディトウサマーノー ヌササーラ シャーストウラ・クリトウ
vidhitsuamāno 'nusaśāra śāstra-kṛt

saḥ—主; *eva*—そのように; *bhūyaḥ*—再び; *nija*—自分自身; *vīrya*—力; *coditām*—～の実行; *sva*—自分の; *jīva*—生命体; *māyām*—外的力; *prakṛtiṁ*—物質自然に; *sisṛkṣatīm*—再び創造しているあいだ; *anāma*—俗な称号のない; *rūpa-ātmani*—魂の姿; *rūpa-nāmanī*—姿と名前; *vidhitsuamānaḥ*—与えることを望んでいる; *anusasāra*—任せて; *śāstra-kṛt*—啓示経典の編纂者。

人格主神は、自らの部分体である生命体にふたたび名前や姿を与えることを望み、かれらを物質自然の管理下に置いた。主自身の力によって、物質自然界はふたたび創造する力を与えられる。

要旨解説

生命体は主の部分体で、2つの状態、すなわちニテヤ・ムクタ (*nitya-mukta*) とニテヤ・バッドダ (*nitya-baddha*) に分類されます。ニテヤ・ムクタは永遠に解放された魂のことで、現わされた物質創造界を超えた主の永遠な住居で、崇高な奉仕をとおして主と愛情の交換をしています。いっぽう、ニテヤ・バッドダは永遠に条件づけられた魂のことで、至高の父

親に対する反抗的態度を正すために、主の外的力・マーヤーに預けられています。部分体として主と永遠の絆を持っていることを永遠に忘れているのです。物質の産物と思っ
ているために幻想の力に惑わされ、その結果、幸せを求めて物質界でさまざまな計画を忙しく
たてています。しかし、その計画にしたがって楽しく生きようとしても、主の意志によっ
て、計画をたてる人々もその計画も、先に説明したように、一定の期間が過ぎれば空しく
消滅していきます。これは『バガヴァッド・ギーター』でも確証されていることです。「ク
ンティーの子よ。創造期の終わったあと、生命体はわたしの体のうちに入り、次の創造の
機が熟したときに、わたしは外的力の代表者をとおして創造しはじめる」（BG 第9章・第
7節）

Bhūyah (ブーヤハ) は「何度も」の意味で、創造・維持・破壊の過程が主の外的力によ
って永遠につづくことを指しています。主は万物の創造者です。しかし、本来主の部分体
で、その甘美な絆を忘れていた生命体に、外的力の束縛を取りのぞく機会がふたび与え
られます。そして、生命体たちの意識をよみがえらせるために、啓示経典が主によってふ
たび作られます。ヴェーダ経典は条件づけられた魂を導くための指南書であり、その導
きによって、魂たちは物質界の創造と破壊の繰り返しから、そして物質の肉体から解放
されます。

主は『バガヴァッド・ギーター』で言います。「創造された世界と物質エネルギーはわ
たしの支配下にある。プラクリティ (prakṛti) の力によって何度も繰り返して創造され、
それはわたしの外的力の代表者によってなされている」

じつは、精神的火花である生命体には物質的な名前や姿などありません。しかし、物質
的姿や名前という物質エネルギーを支配しようとする望みを満たすために、生命体たちに
そのような間違っただけの楽しみを味わう機会が与えられ、また同時に啓示経典をと
おして自分の真の立場を理解する機会も与えられています。愚かで、すべてを忘れさ
った生命体は、いつも偽の姿や名前のために忙しく活動しています。現代の国家主義
はそのような偽の名前や姿が頂点に達した状態です。だれもが偽の名前や姿のため
に狂奔しています。ある条件下で得た姿を真実と思いこみ、さらに与えられた名
前そのものが、条件づけられた魂を多くの「主義」の名前のもとで自分の力を間違
って使うよう惑わします。さまざまな場所や時代に応じて主に作られた経典は、な
にがほんとうの境地かを理解させる糸口を教えてください、人々は経典から教
えを授かることをためらいます。たとえば、『バガヴァッド・ギーター』は全人類
を導く指南書ですが、物質エネルギーの魔術にまどわされた人々は『バガヴァ
ッド・ギーター』が説く生き方を実践しようとは思いません。『シュリーマ
ド・バーガヴァタム』は『バガヴァッド・ギーター』の原則を完全に理解した人の
ためにある、いわば卒業後の知識の研究書です。ざんねんなことに、人々はこの書
物に対する味わいがわからないため、マーヤーに縛られて誕生と死を繰り返すので
す。

第 2 3 節

स वा अयं यत्पदमत्र सूरयो
जितेन्द्रिया निर्जितमातरिश्वनः ।
पश्यन्ति भक्त्युत्कलितामलात्मना
नन्वेष सत्त्वं परिमार्ष्टुमर्हति ॥ २३ ॥

サ ヴァー アヤンム ヤトウ パダンム アトウラ スーラヨー
sa vā ayam yat padam atra sūrayo

ジテンドウリヤー ニルジタ・マータリシュヴァナハ
jitendriyā nirjita-mātariśvanaḥ

パッシャンティ バハクティ・ウトウカリターマラートウマナー
paśyanti bhakty-utkalitāmalātmanā

ナンヴ エーシャ サットウヴァンム パリマールシュトウンム アルハティ
nanv eṣa sattvaṁ parimārṣṭum arhati

sah—主; vai—神意によって; ayam—この; yat—～であるもの; padam atra—ここにその人格主神・シュリー・クリシュナがおられる; sūrayaḥ—偉大な献愛者たち; jita-indriyaḥ—感覚の影響力を克服した人物; nirjita—完全に支配して; mātariśvanaḥ—気; paśyanti—見ることができる; bhakti—献愛奉仕の力によって; utkalita—高めて; amala-ātmanā—心が完全に清められた人々; nanu eṣaḥ—確かに、これだけによって; sattvam—存在; parimārṣṭum—心を完全に浄化させるために; arhati—～にふさわしい。

ここにその至高人格主神がいらっしゃる。厳格な献愛奉仕と気や感覚を完全に抑制した力で物質的意識を清めた偉大な献愛者が、主の姿を見ることができます。またそれこそが、私たちの存在を純粹にする唯一の方法です。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』で言われているように、主のほんとうの質を知る方法は純粹な献愛奉仕の力しかありません。この節でも、厳格な献愛奉仕によって物質的な穢れを心から洗いながせる偉大な献愛者だけがあるののままの主を悟ることができる、と言われています。Jitendriya (ジテンドウリヤ) は、感覚を完全に抑制する人物のことです。諸感覚は肉体上で活発に機能しており、その動きは止められません。ヨーガの方法をとおして感覚の動きを止める不自然な方法は、必ず失敗することが証明されており、ヴィシュヴァーミトゥラ・ムニのような優れたヨーギーでさえその道をたどっています。このムニは、ヨーガの法悦境に入っていたのですが、メーナカーという天上界の女性に会って性欲の犠牲になり、不自然な感覚の抑制は失敗に終わりました。しかし純粹な献愛者の場合、感覚をまっ

たく使わない、という不自然なことはせず、正しいことのために使われます。感覚がもっと魅力的なことに使われれば、つまらないことに魅了される可能性はなくなります。『バガヴァッド・ギーター』では、*感覚はより優れた対象に使うことで抑制できる*、と述べられています。愛情をこめて奉仕をすれば感覚が浄化されますし、また感覚を奉仕という活動に使うことになります。なにもしないわけではありません。主のためにする活動はすべて清められます。物質的観念は、無知だけが原因で生じるものです。ヴァースデーヴァ (Vāsudeva) を超えた存在はありません。ヴァースデーヴァの観念は、長い間感覚器官を奉仕に使う知性ある人物の心にじょじょに作りだされ、やがて最終的にヴァースデーヴァがすべてであると悟る境地に到達します。しかし、献愛奉仕をすればまったく同じ方法が最初から始められ、主の恩寵によって、そして心のうちにいる主自らの導きで、真実の知識すべてが献愛者の心に表わされます。献愛奉仕による感覚の抑制は、唯一の、そしてもっともかんたんな方法なのです。

第24節

स वा अयं सख्यनुगीतसत्कथो
वेदेषु गुह्येषु च गुह्यवादिभिः ।
य एक ईशो जगदात्मलीलया
सृजत्यवत्यत्ति न तत्र सज्जते ॥ २४ ॥

サ ヴァー アヤンム サキ アヌギーター・サトウ・カトホー
sa vā ayam sakhy anugīta-sat-katho

ヴェーデーシュ グヒューシュ チャ グヒヤ・ヴァーディビヒ
vedeṣu guhyeṣu ca guhya-vādibhiḥ

ヤ エーカ イーショー ジャガドゥ・アートウマ・リーラヤー
ya eka īśo jagad-ātma-līlayā

スリジャティ アヴァティ アッティ ナ タトウラ サッジャテー
srījaty avaty atti na tatra sajjate

saḥ—主; *vai*—もまた; *ayam*—この; *sakhi*—友よ; *anugīta*—述べられて; *sat-kathaḥ*—優れた娯楽; *vedeṣu*—ヴェーダ経典の中で; *guhyeṣu*—秘奥; *ca*—もまた; *guhya-vādibhiḥ*—親密な献愛者たちによって; *yaḥ*—～である者; *ekaḥ*—ひとりだけ; *īśaḥ*—至高の支配者; *jagat*—完全な創造の; *ātma*—超靈魂; *līlayā*—崇高な娯楽の表われによって; *srījati*—創造する; *avati atti*—維持と破壊も; *na*—決して～ない; *tatra*—そこ; *sajjate*—それに執着するようになる。

みなさん。この方が人格主神であり、その魅力的で奥深い娯楽は、偉大な献愛者たちに

よってヴェーダ経典の秘奥な部分で述べられています。主だけが物質界を創造、維持し、破壊し、また同時にその行為にはまったく影響されません。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』で述べられているように、すべてのヴェーダ経典が主シュリー・クリシュナの偉大さを讃えられ、『シュリーマド・バーガヴァタム』のこの節でも同じように確証されています。ヴェーダは、偉大な献愛者や主の化身のヴァーサ、ナーラダ、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミー、クマラ、カピラ、プラフラダ、ジャナカ、バリ、ヤマラージャによって数多くの支流になっていますが、とくに『シュリーマド・バーガヴァタム』では、主の活動の秘奥な部分は親密な献愛者シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによってとくに説明されています。『ヴェーダנט・スートラ』やウパニシャッドには、主の娯楽の秘奥な部分について「暗示」されているにすぎません。ウパニシャッドのようなヴェーダ経典では、主の存在に関する一般的概念とははっきり異なる教えが表情豊かに説かれています。主の正体は完全に精神的であり、主の姿、名前、質、主にまつわる物事は物質ではないことが詳細に説明されており、そのため主は知性に欠ける人々に「姿のない存在」として誤解されています。しかしじっさいは、主は至高の人物バガヴァーンであり、部分的にパラマートマーや非人格的なブラフマンとして表わされています。

第 2 5 節

यदा ह्यधर्मेण तमोधियो नृपा
जीवन्ति तत्रैष हि सत्त्वतः किल ।
धत्ते भगं सत्यमृतं दयां यशो
भवाय रूपाणि दधद्युगे युगे ॥ २५ ॥

ヤダー ヒ アダハルメーナ タモー・ディヨー नृपा
yadā hy adharmeṇa tamo-dhiyo nṛpā

ジーヴァンティ タトウライシャ ヒ サットウヴァタハ キラ
jīvanti tatraiṣa hi sattvataḥ kila

ダハッテー バハガム サッチャナム リタンム ダヤーンム ヤショー
dhatte bhagaṁ satyam ṛtaṁ dayāṁ yaśo

バハヴァーヤ ルーパーニ ダダハドゥ ユゲー ユゲー
bhavāya rūpāṇi dadhad yuge yuge

yadā—～のときにはいつでも； *hi*—確実に； *adharmeṇa*—神の意志に反して；
tamaḥ-dhiyaḥ—最低の物質様式にいる人々； *nṛpāḥ*—王や統治者； *jīvanti*—動物のように生

きている; *tatra*—そこで; *eṣaḥ*—主; *hi*—だけ; *sattvataḥ*—超越的; *kila*—確かに; *dhatte*—表わされる; *bhagam*—至上の力; *satyam*—真実; *ṛtam*—実在; *dayām*—慈悲; *yaśaḥ*—素晴らしい活動; *bhavāya*—維持のために; *rūpāṇi*—さまざまな姿で; *dadhat*—表わされて; *yuge*—さまざまな期間; *yuge*—そして時代。

もっとも低い物質様式で動物のように生きている王や統治者が世を治めるとき、主はさまざまな環境や時代に応じて、超越的な姿となって至上の力と真実の実在性を表わし、誠実な人々に慈悲をしめし、素晴らしい行動を見せ、さまざまな超越的な姿を表わすのです。

要旨解説

宇宙創造界は至高主の所有物です。これが『シュリー・イーシャ・ウパニシャッド』の基本の哲学です。すべては至高の生物が所有しています。だれであっても、至高主の財産を侵害してはなりません。主が慈しみの心で各人に与えたものだけを受け入れるべきです。地球、他の惑星、そして宇宙そのものは、主の絶対的な所有物です。生命体は確かに主の部分体、あるいは子どもですから、主の慈悲を授かり、自分に定められた仕事を履行しながら生きる権利を持っています。ですから、だれであっても、主の許可なしで他の人間や動物の権利を侵害してはなりません。王や統治者は主の代表者であり、主の意志が守られているかを管理する責任があるため、マハーラーヂ・ユディシュティラやマハーラーヂャ・パリークシットのような正式に認められた人物を見習う立場にあります。正統な権威がしめす責任と知識にもとづいて世界を統治しなくてはなりません。しかし時には、物質自然の最低の様式である無知の様式 (*tamo-guṇa* タモー・グナ) の影響で、知識も責任感もない王や統治者が権力を手にすることがあり、かれらは、個人の興味を満たすために動物同然の生活をする場合があります。その結果、全世界に混乱と悪意が充満します。縁者びいき、わいろ、詐欺、贈賄、侵害、その反動として起こる飢饉、伝染病、戦争といった不穏な環境が人間社会にきわだつようになります。そして、主の献愛者や誠実な人々が必ず迫害を受けます。この兆候はどれも、主が化身となって降誕し、宗教原則を再確立し、悪意ある統治者を抹殺する時をしめしています。このことも『バガヴァッド・ギーター』で確認されています。

そして主は、物質とは無縁の超越的な姿となって現われます。創造界を健全な状態に保つために降誕するのです。健全な状態とは、主が各惑星に住む生命体の必需品をすべてまかなっている状態をいいます。啓示經典に述べられている規則や原則に従ってさえいけば、幸福に生き、自分に定められた仕事を遂行して最後には解脱に達することができます。物質界は永遠に条件づけられた魂・ニテャ・バッドダの気まぐれを満たすために創造されました。わがままな子に遊び道具が与えられるようなものです。そうでなければ、物質界を創造する必要性はどこにもありません。しかし、反抗的な人間たちが主の許可を得ずに資源

を搾取し、感覚満足のためだけに物質的科学的力に溺れるとき、かれらを罰し、誠実な人々を守るために主が化身となって降誕する必要性が起こります。

主は降誕し、超人的行動を発揮し、自らの至高の権利を証明し、ラーヴァナ、ヒラニヤカシプ、カムサのような物質主義者が徹底的に罰せられます。主は、だれにも真似られない行動をしめします。たとえば、主ラーマとして降誕したとき、インド洋に橋をかけました。クリシュナとして現われたときには、幼いころプータナー、アガースラ、シャカタースラ、カーリヤ、そして最後に父方の叔父カムサたちを殺したり罰したりするような超人的な活動を見せました。またドウヴァーラカーに住んでいたころには16,108人の女王と結婚し、女王たち全員がたくさんの子どもたちに恵まれています。主の家族の数は約10万人にのぼり、それはヤドウ・ヴァンシャという名前で知られています。そしてふたたび、生きているあいだに、そのすべてを消滅させています。主はゴーヴァルダナ・ダーリー・ハリ (Govardhana-dhāri Hari) という名前でもよく知られていますが、それはわずか7歳のときに、ゴーヴァルダナの丘を持ちあげたからです。またクシャトリヤとして勇壮に戦い、邪心の王たちを殺害しました。主は比類なき者 (*asamaurdhva* アサマウルドウヴァ) としても知られています。主と等しいか、あるいは凌ぐ者はいないからです。

第26節

अहो अलं श्लाघ्यतमं यदोः कुल-
महो अलं पुण्यतमं मधोर्वनम् ।
यदेष पुंसामृषभः श्रियः पतिः
स्वजन्मना चङ्क्रमणेन चाञ्चति ॥ २६ ॥

アホー アランム シュラーギヤタマンム ヤドーホ クランム
aho alam ślāghyatamaṁ yadoḥ kulam

アホー アランム プニヤタマンム マドホール ヴァナンム
aho alam puṇyatamaṁ madhor vanam

ヤドウ エーシャ プンムサーンム リシャバハハ シュリヤハ パティオ
yad eṣa puṁsām ṛṣabhaḥ śriyaḥ patio

スヴァ・ジャンマナー チャンクラマネーナ チャーンチャティ
sva-janmanā caṅkramaṇena cāñcati

aho—おお; *alam*—確かに; *ślāghya-tamaṁ*—このうえなく誉れ高い; *yadoḥ*—ヤドウ王の; *kulam*—王家; *aho*—おお; *alam*—確かに; *puṇya-tamaṁ*—このうえなく徳高い; *madhoḥ vanam*—マトウラーの地; *yat*—なぜなら; *eṣaḥ*—これ; *puṁsām*—全生命体の; *ṛṣabhaḥ*—最高の指導者; *śriyaḥ*—幸運の女神の; *patiḥ*—夫; *sva-janmanā*—主の降誕によって; *caṅkramaṇena*—這うことで; *ca añcati*—栄光。

ああ、なんと誉れ高いヤドゥ王家でしょう。そして、全生命体の最高の指導者であり、幸運の女神の夫である主が自ら誕生し、幼いころ歩かれたマトゥラーの地がどれほど徳高い場所であることか。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』で、人格主神シュリー・クリシュナは、自らの超越的な降誕、消失、活動について表情豊かに説明しています。主は、人智を絶する力を使って特定の家族や場所に降誕します。条件づけられた魂のように、肉体を捨てて別の肉体に入る、という誕生ではありません。主の誕生は、太陽が昇って沈んでいく様に似ています。太陽は東の地平線に昇りますが、東の地平線が太陽の親だということではありません。太陽は、太陽系のすべての場所に存在していますが、決まった時間に姿を現わし、そして決まった時間に姿を消します。主も太陽のように繰り返えし宇宙に現われ、やがて私たちの視界から去っていきます。主はあらゆる時代と場所に存在していますが、いわれのない慈悲心から私たちのまえに降誕すると、私たちは主が誕生したことをあたりまえのように考えます。啓示経典の言葉をとおしてこの真理を理解できる人はだれでも、肉体を終えたあとに間違いなく解放されます。解脱の境地は、何度も誕生を繰り返えしたのちに、厳格な改悛や苦行をし、知識や放棄心を得たあとに達成されます。しかしその解脱は、主の超越的な誕生や行動について真に理解するだけですぐに達成できます。それが『バガヴァッド・ギーター』の見解です。しかし、無知の暗闇にいる人は、物質界での主の誕生と活動は、ふつうの生命体と同じものと決めつけます。そのような不完全な結論に従っても、だれも解脱を達成することはできません。ですから、マトゥラーの地でヴァスデーヴァ王の子としてヤドゥ王家の家族に誕生したことは、主の内的力による崇高な配慮によるものです。ヤドゥ王家の幸運とマトゥラーの地の住民の幸運は物質的には判断できません。主の誕生と活動の超越性を知るだけで解脱が達成できるのであれば、家族として、あるいは隣人として主と一っしょに暮らした人々がどれほど幸運だったか容易に想像できます。幸運の女神の夫である主と交流できるほど幸運な人々はすべて、*ありきたりの解脱よりさらに素晴らしい境地を確実に達成*しています。ですから、文字通り、王家と土地の両方が、主の恩寵によって誉れ高い存在になっているということです。

第 2 7 節

अहो बत स्वर्गशसस्तिरस्करी
कुशस्थली पुण्ययशस्करी भुवः ।
पश्यन्ति नित्यं यदनुग्रहेषितं

स्मितावलोकं स्वपतिं स्म यत्प्रजाः ॥ २७ ॥

アホー バタ スヴァル・ヤシャサス ティラスカリー
aho bata svar-yaśasas tiraskarī

クシャスタハリー プニヤ・ヤシャスカリー プヴァハ
kuśasthalī puṇya-yaśaskarī bhuvah

パッシャンティ ニッテヤム ヤドウ アヌグラヘーシタム
paśyanti nityam yad anugraheṣitam

スミターヴァオーカム スヴァ・パティナム スマ ヤトウ・ブラジャーハ
smitāvalokam sva-patim sma yat-prajāh

aho bata—なんと素晴らしいことか; *svah-yaśasaḥ*—天国の惑星の栄光; *tiraskarī*—打ち負かしたものの; *kuśasthalī*—ドウヴァーラカー; *puṇya*—徳; *yaśaskarī*—有名な; *bhuvah*—地球; *paśyanti*—見る; *nityam*—いつも; *yat*—～であるもの; *anugraha-iṣitam*—恩恵を授けるために; *smita-avalokam*—優しい微笑みという恩寵のこもったまなざし; *sva-patim*—生命体の魂（クリシュナ）に; *sma*—常だった; *yat-prajāh*—その場所の住民たち。

ドウヴァーラカーが天国の惑星の栄光さえ凌ぎ、地球の名声を高めているのはたしかにすばらしいことです。ドウヴァーラカーの住民は、全生命体の魂であり、愛情あふれる姿をしたクリシュナをいつも見えています。主はやさしい微笑みで住民たちをみつめ、そして恩寵をさずけています。

要旨解説

天国の惑星には、インドラ、チャンドラ、ヴァルナ、ヴァーユといった半神が住んでおり、敬虔な魂は、地球でさまざまな善行を積んだあとにそのような惑星に到達します。現代科学者も、高位の天体では時間の基準が地球と異なることを認めています。このように、啓示経典の記述から、（地上の計算で）1万年という寿命があることがわかります。地上の6ヶ月は天国の惑星の1日に相当し、感覚を楽しむ便宜も寿命に比例して高く、住人たちも美しさも伝説に出てくるような美しい姿をしています。地上に住む人々は、天国の暮らしが地球よりはるかに快適であることを聞いているため、天国に行きたいと切望しています。現代人は宇宙船で月に行こうとしています。このような事情を考えると、天国の惑星は地球よりも華やかな環境にあることがわかります。それでも、主シュリー・クリシュナが王として君臨したドウヴァーラカーゆえに、地球の名声天国よりも高められたのです。ヴリンダーヴァン、マトウラー、ドウヴァーラカーという3箇所の聖地は、宇宙の名だたる星よりも重要な場所とされています。これらの場所は永遠に神聖な場所とされていますが、それは、主が降誕するところでは、とくにこのような崇高な地で超越的な活動が

展開されるからです。そこは永遠に主の神聖な地であり、いまでこそ主は私たちの目には見えませんが、住民はいまもその聖地の恩恵に浴しています。主は全生命体の魂であり、本来の姿であるスヴァルーパ (svarūpa) として、主との交流をとおして崇高な生活に加わってほしいといつも望んでいます。主の魅力的な姿とやさしい微笑みはあらゆる人の心に深く刻まれ、ひとたび生命体はその境地に入れば、もどってくるのではない神の王国に入ることが許されます。これが『バガヴァッド・ギーター』で確証されていることです。

天国の惑星は、物質的楽しみを味わえることで知られていますが、『バガヴァッド・ギーター』(第9章・第20-21節)でわかるように、過去の善行のたくわえを使いきったときには、また地球に戻ってこなくてはなりません。ドゥヴァーラカーがそのような天国の惑星よりも重要であることは疑いようのない事実です。微笑みをふくんだ主のまなざしを授かった人はだれでも、苦しみのもとと主が断言する墮落した地球にぜったいに戻ってこないからです。地球だけではなく、宇宙にあるすべての惑星は苦しみのもとです。なぜなら、どの惑星であっても、永遠な生活、永遠な至福、永遠な知識がないからです。主に愛情奉仕をしている人たちは、ドゥヴァーラカー、マトウラー、ヴリンダーヴァンのいずれかに住むよう勧められています。この場所で奉仕をすればその結果は倍増され、啓示經典に記されている教えに従うために聖地を訪れる人たちは、まちがいなく主シュリー・クリシュナが住んでいたときと同じ結果が得られるからです。主の住居と主自身はまったく同じであり、経験豊かな献愛者に導かれている純粋な献愛者は、いまでもあらゆる結果を得ることができるのです。

第28節

नूनं व्रतस्नानहुतादिनेश्वरः
 समर्चितो ह्यस्य गृहीतपाणिभिः ।
 पिबन्ति याः सख्यधरामृतं मुहु-
 र्व्रजस्त्रियः सम्मुमुहुर्यदाशयाः ॥ २८ ॥

ヌーナンム ヴラタ・スナーナ・フターディネーシュヴァアラハ
 nūnam vrata-snāna-hutādineśvaraḥ

サマルチトー ヒ アッシャ グリヒータ・パーニビヒ
 samarcito hy asya gr̥hīta-pāṇibhiḥ

ピバンティ ヤーハ サキ アダハラームリタンム ムフル
 pibanti yāḥ sakhy adharāmṛtaṁ muhur

ヴラジャ・ストウリヤハ サンムムフル ヤドウ・アーシャヤーハ
 vraja-striyaḥ sammumuhur yad-āśayāḥ

nūnam—前世で確かに; vrata—誓い; snāna—沐浴; huta—火の儀式; ādinā—これら

べてによって; *īśvaraḥ*—人格主神; *samarcitaḥ*—完璧に崇拜した; *hi*—確かに; *asya*—主の; *grhīta-pāṇibhiḥ*—結婚した妻たちによって; *pibanti*—味わう; *yāḥ*—～である人々; *sakhi*—友よ; *adhara-amṛtam*—主の唇の甘露; *muhuh*—何度も何度も; *vraja-striyaḥ*—ヴラジャブーミの乙女たち; *sammumuhuh*—よく気を失う; *yat-āśayāḥ*—そのような好意を期待している。

みなさん。主が迎え入れた妻たちのことを考えてみてください。誓い、沐浴、火の儀式を為しとげ、宇宙の主を完璧に崇拜し、そしていま、主の唇の甘露を（口づけされて）いつも味わっています。ヴラジャブーミの乙女たちは、そのような恩寵を思いうかべるだけでよく気を失うことがあります。

要旨解説

経典で定められている宗教上の儀式は、条件づけられた魂の俗な気質を清めるためにあり、その儀式によって至高主に超越的な奉仕ができる段階にじょじょに高められます。純粹な精神生活という境地に到達することが最高完成であり、その境地をスヴァルーパ (*svarūpa*)・生命体の正体といいます。解脱とはこのスヴァルーパの境地にもどることを指します。この完璧な境地で、生命体は5段階の愛情奉仕を築きあげ、そのひとつがマードウリヤ・ラサ (*mādhurya-rasa*)・恋愛感情での奉仕です。主は、いつでも自ら完璧な方ですから、なにかを求めることはありません。しかし、自分が気にかけている献愛者の熱烈な愛情を満たすために、主人、友人、息子、夫になります。この節では、主の2種類の献愛者がする恋愛感情の奉仕について述べられています。ひとつはスヴァキーヤ (*svakīya*)、もうひとつはパラキーヤ (*parakīya*)です。どちらも人格主神クリシュナとの恋愛感情に関連しています。ドゥヴァーラカーの女王たちはスヴァキーヤ、つまり正式に結婚した妻ですが、ヴラジャの乙女たちの場合は、主が未婚だったときの友だちでした。主は16歳までヴリンダーヴァンで暮らし、近所の乙女たちとの友人関係はパラキーヤにありました。この乙女たちも、そして女王たちも、経典に定められている誓い、沐浴、火の儀式を為しとげて苦行をした人たちです。儀式とは、たんに儀式をするのが目的ではなく、また果報的活動も、知識の修養も、神秘的力の完成も、それだけが目的ではありません。主に、本来かつ超越的な奉仕をするために、スヴァルーパという最高境地に到達するためにあります。各生命体は、先に挙げた5種類の1つの段階で主と愛情交換をする立場にあり、純粹かつ精神的スヴァルーパを得たときに、その関係は、俗な質のない状態として表われます。主が妻と、また恋人として主と結ばれたいと思っていた乙女と交わす口づけは、俗な倒錯された質とは無関係です。俗な感情だとしたら、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような解脱を達成した人物が、その様子を楽しんだりはしませんし、また主シュリー・チャイタンニヤ・マハーブラブも、俗世間の生活を捨てたあとにそのような話を楽し

もうとするはずがありません。この境地は、数多くの苦行生活を経験したあとに得られるものなのです。

第29節

या वीर्यशुक्लेन हताः स्वयंवरे
प्रमथ्य चैद्यप्रमुखान् हि शुष्मिणः ।
प्रद्युम्नसाम्बाम्बसुतादयोऽपरा
याश्चाहता भौमवधे सहस्रशः ॥ २९ ॥

ヤー ヴィーリヤ・シュルケーナ フリターハ スヴァヤンムヴァレー
yā vīrya-sūlkena hṛtāḥ svayamvare

プラマテヤ チャイデヤ・プラムカハーン ヒ シュシュミナハ
pramathya caidya-pramukhān hi śuṣmiṇaḥ

プラデュムナ・サーンムバーンムバ・スターダヨー パラー
pradyumna-sāmbāmba-sutādayo 'parā

ヤーシュ チャーフリター バハウマ・ヴァデヘー サハスラシャハ
yāś cāhṛtā bhauma-vadhe sahasraśaḥ

yā—その女性; *vīrya*—力; *sūlkena*—代償を払うことで; *hṛtāḥ*—力尽くで連れ去った; *svayamvare*—花婿を選ぶ公開試合で; *pramathya*—苦しんでいる; *caidya*—シシュパーダ王; *pramukhān*—～を筆頭とする; *hi*—きっぱりと; *śuṣmiṇaḥ*—すべてがひじょうに強大な; *pradyumna*—プラデュムナ (クリシュナの子息); *sāmba*—サーンバ; *amba*—アンバ; *suta-ādayaḥ*—子どもたち; *aparāḥ*—他の女性たち; *yāḥ*—～である人々; *ca*—もまた; *āhṛtāḥ*—同じように連れてこられた; *bhauma-vadhe*—王たちを殺したあと; *sahasraśaḥ*—何千もの者たちに。

その女性たちの子息には、プラデュムナ、サーンバ、アンバたちがいます。女性たちとはルクミニー、サチャバーマー、ジャーンバヴァティーなどで、主はスヴァヤンヴァラ儀式の会場でかのじょたちを力づくで連れさり、そのあとシシュパーラなど多くの強大な王たちを撃退しました。他の女性たちもやはり、主がバウマースラと数千におよぶ臣下たちを殺害したあと、力づくで手に入れたものです。すばらしい栄光に満ちた女性たちなのです。

要旨解説

強大な王の卓越した娘は公開試合という形で自分の夫を選ぶことが許されており、そのような試合をスヴァヤンヴァラ (*svayamvara*) 「花婿選び」といいます。スヴァヤンヴァラ

ラは、公開で競争相手が競いあうことから、参加する王子たちは王女の父親に招待され、ふつう、スポーツ精神で勝敗が争われます。しかしその戦いが熾烈をきわめ、交戦する王子が殺されることがあり、勝利した王子に、多くの王子が殺される覚悟で求めていた王女が戦利品としてさずけられます。ルクミニーは主クリシュナの主要な女王でしたが、ヴィダルバ (Vidarbha) の王の娘でした。王は高貴な資質を持つ美しい我が子を主クリシュナに嫁がせたいと思っていました。いっぽう長男は、クリシュナのいどこにあたる王子のシシュパーラを考えていました。そのため公開試合がおこなわれ、いつでもそうであったように、主クリシュナはシシュパーラを苦しめ、他の王子たちを無敵の力で撃退させたあと、勝利をおさめました。ルクミニーには10人の子にめぐまれ、そのひとりがプラデムナです。ほかにも主クリシュナによって同じように連れさられた王女たちがいます。主クリシュナが勝ち得たこの美しい戦利品については、第10編に余すところなく説明されています。バウマースラは自分の欲情を満たすために16,100の美しい王女を誘拐し、宮殿に閉じこめていました。少女たちは悲痛の思いで主クリシュナに救いを求め、その祈りを聞いた慈悲深い主はバウマースラと戦って殺害し、救いだしました。捕らわれていた王女たちは、社会の通念では穢 (けが) れた女性とされるのですが、主に妻として受けいられました。あらゆる力を持つ主は、かのじよたちの慎ましい祈りを聞きいれ、他の高貴な女王たちとともに妻としたのです。こうして、主クリシュナはドウヴァーラカーで16,108人の女王と暮らし、それぞれが10人の王子にめぐまれました。子どもたちは育ち、父親となって多くの子どもをもうけました。主クリシュナの家族の合計は1,000万人にのぼります。

第30節

एताः परं स्त्रीत्वमपास्तपेशलं
 निरस्तशौचं बत साधु कुर्वते ।
 यासां गृहात्पुष्करलोचनः पति-
 र्ना जात्वपैत्याहृतिभिर्हृदि स्पृशन् ॥ ३० ॥

エーターハ パランム ストウリートウヴァンム アパースタペーシャランム
etāḥ param strītvam apāstapeśalam

ニラスタ・シャウチャンム バタ サードウ クルヴァター
nirasta-śaucam bata sādhu kurvate

ヤーサーンム グリハートウ プシュカラ・ローチャナハ パティル
yāsām gṛhāt puṣkara-locanaḥ patir

ナ ジャートウヴァ アパイティ アーフリティビヒル フリディ スプリシャン
na jātv apaity āhṛtibhir hṛdi sprśan

etāḥ—これらすべての女性たち; *param*—最高の; *strītvam*—女性であること;

apāstapeśalam—一人ではない; *nirasta*—～なしで; *śaucam*—純粹さ; *bata sādhu*—吉兆に讃えられて; *kurvate*—彼女たちを～にする; *yāsām*—～である者たちから; *grhāt*—家庭; *puṣkara-locanaḥ*—蓮華の目を持つ方; *patiḥ*—夫; *na jātu*—決してどんな時でも; *apaiti*—離れる; *āhṛtibhiḥ*—居ることで; *hṛdi*—心の中の; *spṛśan*—愛されて。

かのじょたちは、自由と純潔をうばわれた生活を強いられていましたが、吉兆な祝福を授かりました。夫となった、そして蓮華の目をした人格主神は、女王たちをけっして家庭に置きざりにすることはありませんでした。高価な贈り物をしながら、かのじょたちの心をいつも満たしていたのです。

要旨解説

主の献愛者は純粹になった魂です。主の蓮華の御足に誠実に身をゆだねる魂は主に受け入れられ、そしてその魂はすぐにあらゆる物質的穢れから解放されます。そのような献愛者は物質自然の三様式を超えています。献愛者は、奉仕に必要な資格をそなえていないわけではありません。ガンジス川がよごれた排水と混じっても、2種類の水は同じ質でありつづけるようなものです。女性、商人、労働者の知性はそれほど高くなく、また物質的な面を多くそなえているため、神の科学を理解したり、主に愛情奉仕をしたりすることは難しいとされています。それよりも劣っているのはキラータ、フーナ、アーンドウラ、プリンダ、プルカシャ、アービーラ、カンカ、ヤヴァナ、カサなどなどと呼ばれる人種ですが、こういう人たちでも、主への献愛奉仕を正しく実践すれば解放されます。主に奉仕をすることで、そのような不適格な気質はなくなり、純粹な魂となって神の王国に入ることができます。

バウマースラに捕らわれて純潔さを失われた状態にあった王女たちは、誠実に主シュリー・クリシュナに救いを求め、その思いが、献愛という美德となってかのじょたちの心を純粹にしたのです。だからこそ主に妻として受け入れられ、輝かしい生涯を送ることができました。このような栄光は、主がかのじょたちを熱愛する夫としてふるまったときに、さらに高まりました。

主はこの16,108人の妻たちといつも暮らしをわかちあっていました。自らを16,108の体に分身させましたが、一人ひとりが主自身であり、根源の人格主神としての特質を失うことはありませんでした。シュルティ・マントラは「主は自らを無数の体に分身させる」と確認しています。そして、これほど多くの妻の夫として、ひじょうに高価な贈り物をしながら王女たちの心を満足させていました。女王のひとり、サチャバーマーには、天国からパーリジャータ (*pārijāta*) の花を持ちかえって植えています。主を夫に迎えたいと望む人はだれでも、主にそのような望みを完全に満たしてもらえ、ということです。

第31節

एवंविधा गदन्तीनां स गिरः पुरयोषिताम् ।
निरीक्षणेनाभिनन्दन् सस्मितेन ययौ हरिः ॥ ३१ ॥

エーヴァンムヴィダハー ガダンティーナーム
evamvidhā gadantīnām

サ ギラハ プラ・ヨーシターナム
sa girah pura-yoṣitām

ニリークシャネーナービヒナンダン
nirikṣaṇenābhinandan

サスミテーナ ヤヤウ ハリヒ
sasmitena yayau hariḥ

evamvidhāḥ—このように; *gadantīnām*—このように主に祈り、主について話している;
saḥ—主; *girah*—言葉の; *pura-yoṣitām*—都の女性たち; *nirikṣaṇena*—彼女たちに投げかけた主のまなざしという恩恵によって; *abhinandan*—そして彼女たちを歓迎している;
sa-smitena—微笑んだ顔で; *yayau*—去った; *hariḥ*—人格主神。

ハスティナープラの女性たちが、そのように主を迎え、主について話している様子を見て主は微笑み、その心のこもった挨拶を受け、恩恵のまなざしを投げかけながら都から出ていった。

第32節

अजातशत्रुः पृतनां गोपीथाय मधुद्विषः ।
परेभ्यः शङ्कितः स्नेहात्प्रायुङ्क्त चतुरिणीम् ॥ ३२ ॥

アジャータ・シャトウルフ プリタナーム
ajāta-śatruḥ pṛtanām

ゴーपीタハーヤ マドウ・ドウヴィシャハ
gopīthāya madhu-dviṣaḥ

パレービヤハ シャンキタハ スネーハートウ
parebhyaḥ śāṅkitaḥ snehāt

プラーユンクタ チャトウル・アンギニーナム
prāyuṅkta catur-aṅgīṇīm

ajāta-śatruḥ—マハーラージ・ユデイシュティラ、だれにも敵と思われない人物;
pṛtanām—守備隊; *gopīthāya*—保護するために; *madhu-dviṣaḥ*—マドウの敵（シュリー・

クリシュナの); *parebhyaḥ*—他人 (敵) から; *śāṅkitaḥ*—～を恐れて; *snehāt*—愛着から; *prāyunkta*—従事した; *catuḥ-aṅgiṇīm*—4種類の防御陣。

マハーラーヂ・ユディシュティラは、だれにも敵視されない人物だったが、4種類の防御体制 (馬、象、戦闘馬車、軍隊) を敷き、アスラ (悪魔) の敵である主クリシュナを守ろうとした。敵を警戒するための、そして主への愛着ゆえの措置だった。

要旨解説

通常使われる守備体制は、馬と象が戦闘馬車と軍隊に統合される構成です。馬と象は、丘、森、平地など、どこにでも進軍できるよう訓練されます。戦闘馬車の御者は、破壊力のある矢を放って多くの馬や象と戦うことができ、その力はブラフマーストラ (現代の核兵器に類似した武器) に対抗できるほどでした。マハーラーヂ・ユディシュティラは、クリシュナが万民の友であり、また幸福を願う方であることは知っていましたが、生まれながらにして主を憎むアスラたちがいたことも事実です。そのため、主がだれかに攻撃されることを恐れ、また主を愛する思いから、あらゆる種類の守備隊を使って主クリシュナを守ろうとしました。主クリシュナは、必要とあらば、敵に攻撃されても身を守る力を十分にそなえている方です。それでもマハーラーヂ・ユディシュティラがとった措置をすべて受けいれました。年上のいとこだった王に背くつもりはなかったからです。主は、超越的な冒険を楽しみながら言われるとおりにしていましたが、無力な幼少期にはヤショーダーマターに守られて育ちました。それが主の崇高なリーラー (*līlā*)、娯楽です。主と献愛者が交わす超越的な愛情交換は、超越的至福の味わいのなかに表わされ、その至福は、ブラフマーナンダ (*brahmānanda*) の喜びでさえ遠くおよびません。

第33節

अथ दूरागतान् शौरिः कौरवान् विरहातुरान् ।
सन्निवर्त्य दृढं स्निग्धान् प्रायात्स्वनगरीं प्रियैः ॥ ३३ ॥

アタハ ドウラーガターン シャウリヒ
atha dūrāgatān śauriḥ

カウラヴァーン ヴィラハートウラーン
kauravān virahāturān

サンニヴァルテヤ ドウリダハンム スニグダハン
sannivartya dṛḍham snigdhan

プラーヤートウ スヴァ・ナガリーンム プリヤイヒ
prāyāt sva-nagarīm priyaiḥ

atha—そのように; *dūrāgatān*—長い間主に伴って; *śauriḥ*—主クリシュナ; *kauravān*—パーンダヴァ兄弟たち; *virahāturān*—別れる思いに胸打ちひしがれて; *sannivartya*—丁寧さに説得した; *ḍṛdham*—決心した; *snigdhan*—愛情に満たされて; *prāyāt*—進んだ; *sva-nagarīm*—自分の都市（ドウヴァーラカー）に向かって; *priyaiḥ*—親しい仲間たちと。

主クリシュナを深く愛するパーンダヴァ兄弟たちは、どこまでも主についていこうとする。しかし、確実に訪れる別れのときを考えると、その胸は張りさける思いだった。しかし主はかれらに都へもどるよう言いかけ、愛しい仲間たちとともにドウヴァーラカーに向けて去っていった。

第 3 4 – 3 5 節

कुरुज्जालपाञ्चालान् शूरसेनान् सयामुनान् ।
ब्रह्मावर्तं कुरुक्षेत्रं मत्स्यान् सारस्वतानथ ॥ ३४ ॥
मरुधन्वमतिक्रम्य सौवीराभीरयोः परान् ।
आनर्तान् भार्गवोपागाच्छ्रन्तवाहो मनाग्विभुः ॥ ३५ ॥

クル・ジャンガラ・パーンチャーラーン
kuru-jāṅgala-pāñcālān

シューラセナーン サヤムナーン
śūrasenān sayāmunān

ブラフマーヴァルタンム クルクシェートウランム
brahmāvartam kurukṣetram

マトウツシャー ーサーラスヴァター ーアタハ
matsyān sārasvatān atha

マル・ダハンヴァンム アティクラミヤ
maru-dhanvam atikramya

サウヴィーラービヒーラヨーホ パラーン
sauvīrābhirayoḥ parān

アーナルターン バハールガヴオーパーガーチ
ānartān bhārgavopāgāc

チラントヴァーホー マナーグ ヴィブフ
chrāntavāho manāg vibhuḥ

kuru-jāṅgala—デリー地方; *pāñcālān*—プンジャブ州の一部; *śūrasenān*—ウツタル・プラデーシュ州の一部; *sa*—〜と共に; *yāmunān*—ヤムナー川の岸辺一帯; *brahmāvartam*—ウツタル・プラデーシュ州北部の一部; *kurukṣetram*—戦いがあった場所; *matsyān*—マツ

ヤ地方; *sārasvatān*—プンジャブ州の一部; *atha*—など; *maru*—ラジャスタン州、砂漠の地; *dhanvam*—マデヤ・プラデーシュ州、水がひじょうに少ない場所; *ati-kramya*—通過したあと; *sauvira*—サウラストラ; *ābhīrayoḥ*—グジャラート州の一部; *parān*—西側; *ānartān*—ドウヴァーラカー地方; *bhārgava*—おお、シャウナカ; *upāgāt*—見舞われる; *śrānta*—疲労; *vāhaḥ*—馬たち; *manāk vibhuḥ*—わずかに、長旅のために。

シャウナカよ。主は次にクルジャーナガラ、パーンチャーラー、シューラセーナー、ヤムナー川の岸辺、ブラフマーヴァルタ、クルクシェートラ、マツヤー、サーラスヴァター（水の少ない、砂漠一帯）に向かった。このような地方を通過したあと、サウヴィーラとアービーラ地方に到着し、最後にその西方にあるドウヴァーラカーへ到着した。

要旨解説

主が通った各地区は当時別の名前では呼ばれていましたが、この節で提供されている情報からしめされているように、主はデリー、プンジャブ、ラジャスタン、マデヤ・プラデーシュ、サウラストラ、グジャラートをとおり、最後にドウヴァーラカーという自分の都に到着しています。昔といまの地名が一致するかどうかを調べてもなにも得られませんが、この節からわかるのは、ラジャスタンの砂漠一帯と、水が不足していたマデヤ・プラデーシュは、すでに5,000年前前からあったということです。砂漠は最近になって形成されたとする地質学者の節は、『シュリーマド・バーガヴァタム』の見解とは違います。宇宙の変化にはさまざまな地質年代もかかわってくるため、この問題は熟達した地質学者の手にゆだねることにしましょう。私たち献愛者は、いま主がクル地方から自分の都ドウヴァーラカーダーマに到着したことに満足しています。クルクシェートラはヴェーダ時代から現在まで存在しており、クルクシェートラが存在を無視したり、なかったなどと言ったりする解説者は、じつに愚かな間違いをおかしています。

第36節

तत्र तत्र ह तत्रत्यैर्हरिः प्रत्युद्यतार्हणः ।
सायं भेजे दिशं पश्चाद्विष्टो गां गतस्तदा ॥ ३६ ॥

タトウラ タトウラ ハ タトウラテヤイル
tatra tatra ha tatratyair

ハリヒ プラテュデヤタールハナハ
hariḥ pratyudyatārhaṇaḥ

サーヤンム ベヘーजेー ディシヤンム パシュチャードウ
sāyam bheje diśam paścād

ガヴィシュトホー ガーンム ガタス タダー
gaviṣṭho gām gatas tadā

tatra tatra—さまざまな場所で; ha—そのようになった; tatratyaiḥ—地元の住民たちによって; hariḥ—人格主神; pratyudyata-arhaṇaḥ—贈り物を受け取り、崇拝された; sāyam—夕方; bheje—優先して; diśam—方角; paścāt—東方; gaviṣṭhaḥ—空にある太陽; gām—海に向かって; gataḥ—去って; tadā—その時。

そのような地域をとおるたびに主は歓迎され、崇拝され、そしてさまざまな贈り物を受けた。またどこにいても、日が沈めば旅を中断して夕方の儀式をした。日が沈んだあとには必ずおこなったのである。

要旨解説

主は、この節にあるように、旅をしているときでも必ず宗教原則に従っていました。主さえも果報的活動という義務に従う必要があった、とする哲学的推論があります。しかし、主の場合はそうではありません。善行や悪行には依存していないのです。主は絶対的な方ですから、主がすることはすべてだれにとっても良いことです。しかし、主が地上に降誕するときは、献愛者を守り、不信心な非献愛者を罰するために行動します。主には義務に従う必要はないのですが、人々がしたがえるように、なんでもします。それがほんとうの教えです。自ら正しい行為をしめし、同じことをほかの人に教えます。でなければ、目的のない教えにはだれも従いません。主が結果を授ける方なのです。主は自ら満ちたりた方ですが、啓示経典の規則にしたがって行動し、私たちにその方法をしめします。そうしなければ、一般人は道を踏みはずすことでしょう。しかし、主の超越的特質を理解した高潔な人物は、主をまねようとはしません。それはありえないことです。

人間社会にいる主は、万民の義務になっていることをしますが、ふつうの生命体にはまねのできない途方もないことをします。この節で言われているように、主が従っている夕方の祈りはだれでも従わなくてはなりません、山を持ちあげたり、ゴピーたちと踊りをおどったりするような行為は、だれにもできません。不潔な場所からでさえ水を蒸発させる太陽のその能力を、だれがまねられるでしょうか。もっとも力強い主は完全な善行ができますが、私たちがそのような行為をまねる人は、自分がいつまでも苦しまなくてはなりません。ですから、なにをするにしても、主の慈悲の権化である精神指導者という経験豊かな案内者に身をゆだねるべきです。それができる人には、精神的に高められる道が保証されます。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第11章、「主クリシュナ、ドウヴァーラカーに向けて出立する」の要旨解説を終了します。